ブログ「石油と中東」:https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943
マイライブラリー・サウジアラビア:http://mylibrary.maeda1.jp/SaudiArabia.html
マイライブラリーNO.0462

(再録)現代中東の王家シリーズ:サウジアラビア・サウド家

初出:2007.9
再録:2019.3

(注)以下の人名、肩書はいずれも 2007 年当時のものです。

(第 1 回)サウド家のはじまり

(サウド家の紋章)

サウジアラビアはサウド家が支配する王制国家であり、その正式な国名は'Kingdom of Saudi Arabia'である。そもそも「サウジアラビア」とは「サウド家のアラビア」と言う意味であり、支配一族の名前が国名の一部をなしている国家は世界的にも珍しく、同国以外ではイスラームの開祖ムハンマドにつながる名門ハシミテ家の名を冠したヨルダン(Hashemite Kingdom of Jordan)だけであろう。

サウド家の歴史は 18 世紀初頭にさかのぼる[1]。始祖サウドは当時アラビア半島中央部、現在の首都リヤドのはずれにあるオアシス、ディルイーヤの支配者であった。同じ頃、アラーの唯一絶対性を説く「サラフィー運動」に傾注していた若いイスラーム法学者ムハンマド・ビン・ワッハーブ(*)がウヤイナ・オアシスで布教活動を行っていた。
(*)「ワッハーブの息子ムハンマド」の意味。「ビン」は息子を表す接頭辞であり「イブン」と発音することもある。娘の場合は「ビント」。アラブ人は通常このように自分の名前(First Name)の後に父親の名前(Second Name)、更には祖父の名前(Third Name)を付け、最後に定冠詞「al」の後に一族名(Family Name)を付する。

ムハンマドはマッカでイスラーム法学を学び、その後イラクのバスラに長期滞在したが、そこでシーア派の僧職者や信者が日常的に聖者崇拝・預言者崇拝を行っているのを目にした。これに反発したムハンマドは以後原始イスラーム復古のサラフィー運動にのめり込み、各地を巡り布教活動を行った。しかし彼はその過激思想ゆえに行く先々で地元の支配者と衝突、結局故郷ウヤイナに戻った。彼の布教活動は「ワッハーブ派」と称され、後にサウジアラビアの建国原理となったのである。

1725 年にサウドが亡くなるとその息子ムハンマド・ビン・サウドは、ムハンマド・ビン・ワッハーブと盟約を結びアラビア半島中央部(ネジド地方)の部族制圧に乗り出した。二人のムハンマドは、宗教と政治を一体化して勢力を拡大したのである。これがサウド家の原型となる「第一次サウド王朝」であり、ムハンマド・ビン・サウドの 3 人の弟、スナイヤーン、マシャーリ、ファルハンの子孫は今でもそれぞれの名前を家名とするサウド家の有力王族である。第一次サウド王朝はムハンマドの長男サウド及び次男アブダッラーの四代で終わった。

19 世紀初めにはアブダッラーの息子ファイサルが再び勢力を回復して第二次サウド王朝を樹立した。ファイサルはリヤドから紅海沿岸(ヒジャズ地方)に進出、当時オスマン・トルコの支配下にあったマッカ、マディナを支配するまでになった。ファイサルの二人の弟ジャラウィ及びアブダッラーの家系も有力な王族であり(アブダッラー系はトルキ家を呼称)、上記の3つの家系を含め、これら五つの家系はサウド家外戚の「五摂家」とでも言うべき存在として、その子孫はごく最近まで後継者問題を含めたサウド家一族の諸問題を協議する「王室諮問会議」(後述)のメンバーの一員に指名されていた[2]。

しかし第二次サウド王朝は短命に終わり、ファイサルの息子アブドルラハマンはオスマン・トルコの支援を受けたラシード家との戦いに敗れて 1891 年クウェイトに逃れた。アブドルラハマンは当時 11 歳の長男アブドルアジズを含む一族郎党と共にクウェイト首長サバーハ家の庇護のもとで亡命生活を送ったのである。この長男アブドルアジズ・ビン・アブドルラハマンこそ、後の「サウジアラビア王国」(第三次サウド王朝)の初代国王なのである。

因みにサウド家がクウェイトに亡命した 100 年後の 1990 年に、クウェイとのサバーハ家はイラクのサダム・フセイン大統領(当時)に追われ、サウジアラビアに亡命している(イラクのクウェイト侵攻)。この時サウド家はかつてのサバーハ家の恩義に報いるため、彼らを温かく迎え入れたのである。サバーハ家はサウジアラビア西部のタイフに亡命政権を樹立し、翌年の湾岸戦争で祖国に戻るまで、サウド家の全面的な支援を受けた。このようにサウド家とサバーハ家は深い因縁に結ばれていると言える。

(第 2 回)サウド家の亡命生活と 19 世紀末の中東情勢

サウド家当主のアブドルラハマンは 1891 年、宿敵ラシード家にリヤドを追われてクウェイトへ逃れ、同地のサバーハ首長家の庇護のもとで亡命生活を送った。彼の長男で後にサウジアラビア王国(第三次サウド王朝)の初代国王となるアブドルアジズ(通称イブン・サウド)は当時まだ 11 歳であった。

サウド家とラシード家の抗争及びクウェイト・サバーハ首長家がサウド家を庇護した関係は単なる部族間の対立或いは同盟関係によるものではない。そこにはオスマン帝国と大英帝国をめぐる帝国主義の覇権争いの影があったことを見落としてはならない。

当時のオスマン帝国は「瀕死の病人」と言われながらも中東から北アフリカに至る広大な版図を有し、首都のイスタンブールからイスラームの聖都マッカを含むアラビア半島に睨みを利かせていた。ラシード家はオスマン帝国の支援を受けてアラビア半島中央部ネジドの支配権をサウド家と争ってい

たのである。一方の英国はイエメン、オマーンなどアラビア海沿岸一帯に植民地を築き、次にペルシャ湾を制して内陸部へ進出する機会をうかがっていた。こうした中で 1899 年、英国はクウェイトを保護領とすることに成功した。

英国はサウド家とラシード家の抗争を利用してアラビア半島からオスマン帝国の勢力を駆逐することを考えた。そのためクウェイトにサウド家の亡命を受け入れさせて、サウド家を温存しようとしたのである。ラシード家とサウド家の部族抗争はオスマン帝国と大英帝国の代理戦争に仕立てられたと言える。

サラフィー(ワッハーブ)主義の過激なイスラーム思想をバックボーンとするサウド家は、クウェイトにとって必ずしも歓迎すべき食客ではなかったと思われる。後日アブドルアジズと彼のイフワーン軍団がアラビア半島制圧の勢いに乗じてクウェイトに攻め込んだことを考えると、クウェイトの懸念も杞憂ではなかったことがわかる。このような歴史があるため、現在でもクウェイトのサバーハ家及び一般国民はサウジアラビアに対する警戒心を解いていないと言われる。

しかし当時のクウェイト首長ムバラクは、サウド家嫡男アブドルアジズの聡明さが気に入り、彼を非常に可愛がったようである。そのことは外国使節との引見の場にアブドルアジズを同席させたと言うエピソードにも表れている。

こうしてムバラクの庇護の下で英才教育を受けたアブドルアジズは 10 年の歳月をクウェイトで過ごし、その間に勇敢なベドウィン戦士へと成長していった。身長 180 センチ以上の堂々たる体躯のアブドルアジズは、サウド家再興の星として「イブン･サウド（サウド家の息子）」と呼ばれるようになった。彼の正式の呼び名は「アブドルアジズ・イブン・アブドルラハマン・アル・サウド（サウド家のアブドルラハマンの息子アブドルアジズ）」であるが（＊）、一族からは期待と尊敬を込めて「イブン･サウド」と呼ばれたのである。

（＊）アラブ人の名前の呼び方については前回「サウド家のはじまり」参照。

(第 3 回)アラビア半島国盗り物語ー「サウジアラビア王国」の樹立

クウェイトでの亡命生活中、アブドルアジズはサウド家再興の夢を一時たりとも忘れたことは無かった。21 歳になった 1901 年 11 月、機が熟したと判断した彼はわずか 40 人の部下を引き連れて数百キロの砂漠を横断、翌年 1 月リヤドに到着すると夜陰にまぎれて砦を急襲し、ついにラシード家からリヤドを奪還したのである。このアブドルアジズのリヤド城奪還物語はサウジアラビアでは英雄譚として語り継がれ、誰一人知らない者がいないほど有名である。そしてここから彼の「アラビア半島国盗り物語」が始まる。

1904 年春までにアブドルアジズは半島中央部のネジド地方を制圧、ラシード家を北部に追い払った。そして彼は1913年には当時トルコの支配下にあった半島東部のアル･ハサ地方に侵攻し、これを攻略した。アル･ハサは砂漠の遊牧民ベドウィンが羊を放牧するだけの不毛の地であったが、後年その地下に巨大油田が次々と発見され、サウド家及び国民に莫大な富をもたらすことになる。

サウド家の版図が広がるとともにアブドルアジズは、ある時は彼に従い別な時には離反する気まぐれな遊牧民ベドウィンに悩まされた。そこで彼はオアシスに入植地を建設して遊牧民を定着させることにした。入植者たちはサラフィー(ワッハーブ)運動に共鳴する同胞として「イフワーン(同胞団)」と名付けられた[3]。入植仲間としての同朋意識と厳しい戒律のもとでの宗教的一体感を持ったイフワーンは、アブドルアジズの軍事作戦の中核となりアラビア半島統一の大きな力となった。それは第一次サウド王朝でサウド家とワッハーブ家の二人のムハンマドが成し遂げた快挙の再現であり、世俗勢力のサウド家と宗教勢力のイフワーンが結束した成果は、第一次王朝の数倍に匹敵する力を発揮した。ただし、後に国土が平定されると、イフワーンはサラフィー運動に基づく理想の宗教国家を目指してサウド家と対立するようになった。結局アブドルアジズはイフワーン軍団を粉砕して、1932 年に世俗国家「サウジアラビア王国」を建国することになるのである。

アブドルアジズが 1913 年にアル･ハサ地方を征圧した翌年、第一次大戦が勃発した。中東ではオスマン帝国とドイツが組んで英国･フランス連合と対決する図式となり、両陣営は各地の有力部族を味方に引き込んで戦局の主導権を握ろうとした。アラビア半島中央部のヒジャズではラシード家とサウド家がトルコと英国それぞれの陣営に入ったことは既に述べた。そしてアラビア半島西部のヒジャズ地方では、英国はメッカの太守ハシミテ家を支援してメッカからアカバ湾に至る各地でオスマン帝国に対するゲリラ活動を行わせた。この時英国からハシミテ家に送り込まれた軍事顧問が有名な「アラビアのロレンス」である。

第一次大戦は 1918 年に終結し、勝った英国は中東全域での覇権を確立した。英国側についたサウド家はその後もアラビア半島各地の部族を平定し、1921 年にはついに宿敵ラシード家を降伏させた。同じく英国側についたハシミテ家のフセインもヒジャズ王国を建国し、さらに息子達をヨルダン及びイラクの国王に据え、大アラブ王国を目論んだ。しかしヒジャズ王国は 1925 年にアブドルアジズとイフワーン軍団に滅ぼされた。またハーシム家のイラク王国もその後のイラク革命で国王アリ及び一族全員が殺され、今ではヨルダン・ハシミテ王国だけが存続している。サウジアラビアとヨルダンの関係は現在でも微妙だと言われ、特にヨルダン側はサウジアラビアに対して複雑な感情を抱いているようである。国は貧しくとも高貴な血統の王国であると自負するヨルダンには、ベドウィンの成り上がり者で石油成金のサウジアラビアに対するプライドとコンプレックスの感情が交錯しているのであろうか。

ともかくこうしてサウド家はアラビア半島全土を制圧した。そして 1929 年には先にも述べたイフワ

ーン反乱軍との戦闘に圧勝し名実共にアラビア半島の覇者となった。アブドルアジズが「サウジアラビア王国」即ち「サウド家が支配するアラビア王国」の樹立を宣言し、初代国王に即位したのは 1932 年 9 月のことであった。

(第 4 回)サウド家安泰のために：26 人の王妃と 36 人の王子達

アブドルアジズ(イブン・サウド)は、かつて軍事力の中核であったが今や獅子身中の虫となったイフワーン軍団を粉砕しアラビア半島統一を成し遂げた。1932 年、彼はサウド家による王制支配を内外に示す「サウジアラビア王国」の樹立を宣言し、自ら初代国王に即位したのである。(図はサウジアラビア国旗)

半島統一に至る過程でアブドルアジズは多くの部族と戦闘或いは和睦を行った。そしてサウド家に恭順の意を表した部族に対しては従来どおりの領地支配を認めた。アラビア半島は広大な砂漠にオアシスが点在する、まさに「砂の海に浮かぶ数多くの小島」であり、このような国土をサウド家だけで統治することは不可能だったからである。

彼はこれら恭順した部族がサウド家に二度と反旗を翻すことがないように、また遠征当初から同盟を結んだ部族とは信頼関係をさらに深めるためにある手段をとった。その手段とはかれらと血縁関係を築くことであった。即ち彼に従う部族長の娘をアブドルアジズ自身が娶り息子或いは娘を生むことでサウド家と彼らとの絆を確かなものにしようとしたのである。

アブドルアジズのこのようなやり方は血のつながりを何よりも重視するベドウィンの流儀に適うものであった。日本の戦国大名やオーストリアのハプスブルグ家も勢力の維持若しくは拡大のために他家と積極的に姻戚関係を築いたが、サウド家の場合と少し意味合いが異なる。日本の場合は婚姻は形式的であり、むしろ人質としての性格が強いため子供を作るケースは少なかった。またハプスブルグ家の場合は、仏のブルボン家など他国の王家との連携を強める合従連衡の策として娘を嫁がせたのである。これに対しアブドルアジズは他部族の娘との間に子供(特に男子)をもうけることでサウド家を中心とする新たな血縁関係を作りあげ、サウド家を頂点とする一体感を新たに築こうとしたのである。勿論アブドルアジズがそのような婚姻政策を実行することができたのは、イスラーム教が複数の妻を持つことを認めており、またベドウィンが血族関係を何よりも重視したと言う風土的背景があったからである。

彼が実際に何人の妻を娶ったかは不明であるが、26 人の女性に 36 人の王子を生ませたことはサウド家の家系図ではっきりしている。36 人の王子は俗に第二世代と呼ばれアブドルアジズの後を継いでいる。同国の基本法で王位はアブドルアジズの直系男子と決められており、第二世代はサウド第二代国王以下アブダッラー第六代現国王まで年齢順に即位している[4]。サウジアラビアの王位継承問題を語る場合、第二世代の王子の年齢が重要な要素である。

しかしもう一つの重要な要素は王子の母親が誰であるか、と言うことである。36 人の王子は、ある者は同じ母親から生まれた兄弟（同母・同腹の兄弟）であり、ある者は母親が異なる兄弟(異母・異腹の兄弟)である。王子は成人するまで母親の元で育てられるため当然同母の兄弟は異母兄弟に比べて結束が堅い。このため王室内の力関係を考える場合、各王子の母親が誰であるかと言うことが見過ごせない（＊)。その最も有名な例がファハド前国王及びスルタン現皇太子などスデイリ家出身の母親から生まれた 7 人の同母兄弟、いわゆる「スデイリ・セブン」である[5]。第二世代の王子を語る場合は、彼らの生まれた順序(年齢)及び母親の系統が二つのキーポイントになるのである。
（＊）家系図「アブドルアジズ初代国王の王妃とその息子達」参照

第二世代の子供達（即ち第三世代）を含めサウド家は今や第六世代まで誕生しており、1998 年に Abdul Rahman bin Sulaiman Al-Ruwaishid が著したサウド家の家系図によれば、直系男子王族の数は約 8 百人に達している。彼ら 8 百人全員が王位継承権を有しているのである。同国は多産型であるため男子王族の人数はネズミ算式に増えていると考えられる。従って王子の数は現在では千人を超えているとみて間違いないであろう。彼らはアブドルアジズの直系男子であることを表すため、HRH(His Royal Highness)の敬称が与えられており、宮廷費用から相当な額の年金が支給されている[6]。

かれら第三次サウド王朝の王族は「狭義のサウド家王族」であるが、これに対してアブドルアジズの兄弟や従兄弟の末裔など、アブドルアジズ直系以外にも多数のサウド家王族がいる。かれらには HH(His Highness)の敬称を与えられており「広義のサウド家王族」と言える[7]。巷間でサウド家王族の総数が数万人と言われるのはこれら狭義・広義の王族を全て含めた場合を指しているのである。

(第 5 回)アブドルアジズの治世後期：石油の発見と第二次世界大戦

中東で石油を最初に発見したのは英国のアングロ・ペルシャン石油(後の BP)で、1908 年のイランであった。第一次大戦当時英国の海軍大臣であったチャーチルは早くから石油の軍需物資としての重要性に気付いていた。それまでの英国艦隊は石炭を燃料とする蒸気機関だったため各地に石炭と水の補給基地を必要としていた。英国がアジア各地の沿岸沿いに点々と植民地を建設したのはそのような理由もあった。しかし石油を燃料とするディーゼル・エンジンが開発されると、艦船の航続距離と行動範囲は飛躍的に大きくなった。このためチャーチルは中東の石油に目をつけたのである。

それは第一次大戦後の米国にとっても同様であった。アングロ・ペルシャン石油に続いて 1932 年には米国のソーカル社がペルシャ湾のバハレーンで石油を掘り当てた。そして同社は対岸のアラビア半島も有望な油田地帯であると判断し、アブドルアジズに石油利権の供与を申し入れたのである。当時サウジアラビア王国は建国されたばかりで、それまでの相次ぐ半島制圧戦争で財政的に疲弊していたため、アブドルアジズは 5 万ポンドの権利金前払いを条件にソーカルに期間 60 年の石油開発利権を与えた。ソーカル社の試掘は当初失敗の連続であったが、1936 年、7 本目の井戸で遂に油田を掘り当てた。それはサウジアラビアが石油大国となる嚆矢だった。

しかし当時の世界はヒットラーの台頭で戦争の暗雲が垂れ込め、1939 年には第二次世界大戦が勃発した。このため石油が本格的に開発されるようになったのは戦後になってからである。サウジアラビアは第一次大戦同様、第二次大戦でも英米連合軍側についたが、中東そのものは大きな戦場となることはなかった。1945 年 2 月、米国のルーズベルト大統領はヤルタ会談を終えたその帰途、スエズ運河に停泊させたクインシー号にアブドルアジズを招いた。船上会談は友好的な雰囲気の中で行われ、このときからサウジアラビアと米国の戦後蜜月時代が始まったのである。(写真はクインシー号上のアブドルアジズ国王とルーズベルト大統領)

具体的には 1948 年にアラムコ社(Arabian American Company)が設立され、米国主導による本格的な石油の開発が始まった。また軍事協力の面では 1951 年に相互援助条約が締結された。但し船上会談がもたらしたものはプラス面ばかりではなかった。ルーズベルト大統領は会談でナチスに迫害されたユダヤ人難民をパレスチナに入植させたいと提案したが、これに対してアブドルアジズは強く反対した。この問題はイスラエルの建国とその後の 4 度にわたる中東戦争を経て現在まで尾を引き、両国の間に今も大きな溝を作っているのである。

ともあれアラムコが開発した石油はサウジアラビアに大きな富をもたらし、アブドルアジズはその富を教育、インフラ整備などに投じた。例えば 1950 年代には、主要都市を結ぶ道路網の建設が始まり、1951 年には首都リヤドと東部ダンマン間を走る鉄道も開通した。またアラビア半島の東西を結ぶ航空路、ジェッダ港の整備、電話網の拡充など国内開発が急速に進んだ。因みに国内航空路の開設はルーズベルト大統領がアブドルアジズに贈った 1 機の旅客機から始まったと言うエピソードがサウジアラビア国営航空の社史で語られている。

しかしアブドルアジズも寄る年波に勝てず、1953 年 11 月、72 歳でこの世を去った。後を継いで第二代国王に即位したのは彼の二番目の男子（長男は早世）当時 51 歳のサウド王子であった。

(第 6 回) アブドルアジズの息子達に受け継がれる王位

1953 年にアブドルアジズが亡くなると、第二代国王に即位したのは、彼の次男サウド王子であった。アブドルアジズの長男トルキ王子は夭逝したため、サウド王子は実質的な嗣子であり順当な王位継承であった。彼以降現在のアブダッラー第六代国王に至るまでの 5 人の国王はいずれもアブドルアジズの息子達である。但し彼らは全て母親が異なる異母兄弟なのである[8]。

第二代から第六代までの国王とその母親の出身部族を列挙すると、第二代サウド国王の母親はバニ・ハーリド族出身、第三代ファイサル国王の母親はアル・シェイク族出身、第四代ハーリド国王の母親はジャラウィ家出身、第五代ファハド前国王の母親はスデイリ家出身である。そして現在のアブダッ

ラー第六代国王の母親はシャンマリ族出身である(サウド家系図「アブドルアジズ初代国王の王妃とその子息達」参照)。バニ・ハーリド族、アル・シェイク族及びシャンマリ族はいずれもアラビア半島の有力部族であり、またスデイリ家はサウド家と密接な関係を有する一族である。そしてハーリド国王の母親の実家ジャラウィ家は、第一回「サウド家のはじまり」でも触れたが、サウド家を支えるいわゆる「五摂家」の一つである。

各国王の在位年数とその治世中の主な出来事を概観すると、まずサウド第二代国王(在位 1953 年～1964 年)は、父アブドルアジズ初代国王が敷いた路線を踏襲し、教育省、商業省など行政組織の拡充を図り国内政治の基礎固めを行った。対外的には 1956 年にスエズ運河国有化問題に端を発して第二次中東戦争が勃発したが、彼は米国と協力して停戦に導いている。また 1959 年には国際石油会社が原油の公示価格を一方的に引き下げたため国家歳入が危機に瀕したが、彼は他の産油国に呼びかけて OPEC(石油輸出国機構)を結成して国際石油会社に対抗した。彼は生涯に生んだ王子と王女の総数が 110 人といわれるエピソードに象徴されるように、放恣な性格と浪費癖により国家財政を破綻に導いたため、1964 年に一族の長老会議で退位に追い込まれた。

サウドに次いで三男ファイサルが第三代国王に即位した(在位 1964 年～1975 年)。ファイサル国王は英明君主の呼び声が高く、第一次五カ年計画を制定して国内経済の発展に努めた。五カ年計画は現在も継続され、国家発展の基本計画とされている。しかし何と言っても彼の名前を世界に知らしめたのは 1973 年の第四次中東戦争に際して彼がイスラエルとその支援国に対して石油の禁輸措置を発動したことである。これが有名な「第一次オイルショック」であり、石油を武器とするこの戦略は日本を始めとする石油消費国を震撼させた。

そしてこれ以後産油国は巨額の石油収入を手にしオイル・ブームの時代を迎えたのである。ファイサル国王は国内改革にも熱心で女子教育の普及に力を注ぎ、またテレビも導入した。当時宗教界の長老はイスラームの偶像崇拝禁止に反するものとしてテレビや映画などの近代文明に反対していたが、ファイサル国王は彼らを説得してテレビ放送を開始したのである。しかし彼は急速な近代化に反対するサウド家王族の一員によって 1975 年に暗殺され、悲運の名君と呼ばれたのである。

ファイサル暗殺の後をうけて 5 男のハーリドが第四代国王(在位 1975～82 年)になった。ハーリド国王の時代は第二次オイルショック(1979 年)後の油価の上昇と国営石油会社アラムコの完全国有化によりサウジアラビアの石油収入が急増した時代でもあった。一方、イラン革命とそれに続くイラン・イラク戦争により地域の安定が脅かされたため、他の湾岸各国に呼びかけて湾岸協力機構（GCC）を結成した(1981 年)。

1982 年病弱であったハーリドが亡くなると、皇太子のファハドが第五代国王に即位した(在位 1982～2005 年)。ファハドはハッサ王妃を母親とする 7 人兄弟の長男として 1923 年に生まれた(生年については異説もある)。彼ら 7 人兄弟はファハドを含め次男のスルタンが国防相(現皇太子)[9]に、5 男ナイフ[10]が

内相になるなど政府の要職を占め、母親のハッサ王妃がスデイリ家出身であることから「スデイリ・セブン」と称されている。ファハド国王は 1986 年に従来の「陛下」の称号に変えて「二大聖都の守護者(Custodian of Two Holy Mosques)」を名乗ると発表した。二大聖都とはイスラームの三大聖地の中のマッカとマディーナのことであるが（もう一つの聖都はエルサレム)、この称号は世俗君主であるサウド家の支配体制に宗教的権威付けを行ったものと解釈される。彼は豊かなオイル・マネーと強い指導力を駆使して道路、空港など国内のインフラ整備を行った。島国バハレーンとアラビア半島を繋ぐ海上橋「キング・ファハド・コーズウェー」を建設したことなどはその一例である。外交面では 1990 年にイラクのフセイン大統領(当時)がクウェイトに侵攻し、翌年には湾岸戦争が発生した。このときファハド国王はクウェイトのサバーハ首長家を庇護し亡命政権を支えた。

その後彼は病気のため執務不能となり、1995 年以降は皇太子のアブダッラー(現国王)が実質的に国政を司った。ファハド国王は 2005 年に亡くなり、アブダッラーが第六代国王に即位、皇太子にはファハドの弟スルタン国防相が指名されて現在に至っている[11]。

このように第二代から第六代の国王はいずれもアブドルアジズ初代国王の息子達である。その結果、各国王の即位時の年齢はサウド(第二代)こそ 51 歳であったが、それ以降はファイサル 58 歳、ハーリド 62 歳、ファハド 69 歳と代を追う毎に高齢化している。そしてアブダッラー現国王に至っては即位時に既に 81 歳であり、スルタン皇太子も今年 79 歳と言われている。サウド家にとって後継者の若返り問題が大きな課題なのである。

(第 7 回)要職を独占するサウド家の王族(その１)：中央政府閣僚

「サウジアラビア王国」は国王に全ての権力が集中する絶対君主制の国家である。1992 年に制定された「統治基本法」では、政体を君主制とし国王が皇太子を選任すると定められている(同法第 5 条)。そして国王自らが首相となり(同法第 56 条)、副首相及び大臣を任免する(同法第 57 条)。また国王は軍の最高司令官である(同法第 60 条)。同国には国会に相当する諮問評議会があるが、評議会に立法権限はなく、政府が提出する法案を審議するだけで拒否権も無い。この諮問評議会の議員は普通選挙ではなく国王によって任命される。このようにサウジアラビアの政治制度は西欧型民主主義とは全く異質のものなのである。

そもそも「サウジアラビア王国」とは「サウド家によるアラビアの王国」の意味であり、サウド家の家父長がサウジアラビア王国の国王となる仕組みである。そしてアラブ・ベドウィンの一族であるサウド家は絶対家父長制である。従ってサウド家の当主である国王に全ての権限が集中するのはある意味で当然のことである。政府の要職もサウド家の王族が独占することになる。首相である国王は、まず皇太子を第一副首相に任命し、重要な閣僚ポストには兄弟或いは彼らの子息(つまり国王の甥たち)を指名する。因みにアブダッラー国王(左写真)には実の兄弟がいないため、王族閣僚は異母弟またはその子息達である。重要な閣僚ポストとは、国防相、内務相、外相など、サウジアラビアとサウド家の命運を握る治安と外交の閣僚ポストである。その他にも財務相、石油相なども

同国にとっては重要なポストであるが、これらはナイミ石油相に見るように能力のあるテクノクラートに委ねられている[12]。

中央政府の閣僚ポストにある王族とその年齢及び血縁関係を列挙すると以下の通りである。

首相：　アブダッラー国王（83 歳、初代国王の 11 男）
第一副首相兼国防相：　スルタン皇太子（79 歳、同 15 男。スデイリ・セブン次男）
内相：　ナイフ王子(74 歳、同 23 男。スデイリ・セブン五男)
外相：　サウド王子(67 歳、初代国王の孫。故ファイサル第三代国王 4 男)
国務相：　アブドルアジズ王子(36 歳、ファハド前国王 6 男)
都市村落相：　ムッテーブ王子(76 歳、初代国王 17 男)
国防副大臣：　アアブドルラハマン王子（76 歳、同 16 男。スデイリ・セブン三男）
内務副大臣：　アハメド王子(66 歳、同 31 男。スデイリ・セブン末弟)

(注)各王子の年齢については諸説ある。スデイリ・セブンについては前回参照。

サウド外相とアブドルアジズ国務相を除く 6 人はアブドルアジズ初代国王の息子達、いわゆる「第二世代」と言われ、サウドとアブドルアジズは初代国王の孫の「第三世代」である。閣僚の構成で特に目立つのはスデイリ・セブンのメンバーが 4 人いることである。第三世代のアブドルアジズ国務相もスデイリ・セブンの長男である故ファハド前国王の息子であり、従ってスデイリ・グループは上記 8 人の王族閣僚のうち実に 5 人を占めている。

第二世代は現在 70～80 歳の高齢であり、サウド外相も第三世代とは言えすでに 60 歳台後半であり決して若いとは言えない。王族閣僚の中ではアブドルアジズ国務相が際立って若い(36 歳)。ファハド前国王の末子であるアブドルアジズ王子はファハドの存命中に 28 歳の若さで国務相に抜擢されている。彼の就任当時ファハド国王は既に病気がちで、実権はアブダッラー皇太子兼第一副首相(現国王)が握っていた。アブドルアジズの国務相抜擢は当時内外の話題となったが、彼を溺愛するファハド国王のたっての願いをアブダッラー他のサウド家王族が受け入れたものと考えられている。

アブダッラーは 2005 年に国王に即位し、首相に就任して名実共にトップに立った後も、アブドルアジズ国務相を含め王族閣僚を交代させることはなかった。この結果皇太子であり第一副首相と国防相を兼務するスルタンは、1962 年の就任以来半世紀近く国防相をつとめ、ナイフ内相も 32 年間にわたり同一ポストを続けている。今年 3 月、閣僚任期(4 年)が終わったが、アブダッラー国王は上記王族を含め全閣僚を留任させている。アブダッラーは急激な変化を望まない慎重な性格と言われ、今回の閣僚全員の留任もその現れと受けとめられており、特に王族閣僚の扱いについてはサウド家内部に余計な軋轢を生じさせないためと思われる。

そのことはアブダッラーが国王即位後、第二副首相（第一副首相はスルタン皇太子）を指名しなかったことにも現れている。アブダッラー及びスルタンの例に見られるように過去二代の国王が即位後の内閣で指名した第二副首相は、後に国王交替の時に皇太子に指名されている。このためアブダッラ

一国王が第二副首相に誰を指名するかが大いに注目されたが、彼は結局誰も指名しなかったのである。

王族閣僚が高齢化し世代交替の時期にあることは間違いない。しかし 84 歳のアブダッラー国王はサウド家の権力承継の道筋を未だに示していないのである。

(第 8 回)要職を独占するサウド家の王族(その２)：官選知事の顔ぶれ

前章で述べたとおり中央省庁ではアブダッラー国王兼首相をはじめ 6 人の王族が大臣ポストに就き、そこでは今も第二世代(アブドルアジズ初代国王の子息)の存在が大きい。しかし第二世代であるアブドルアジズの 36 人の息子のうち既に 15 人が亡くなり、存命している 21 人も 83 歳のアブダッラー国王を初め高齢者が多い[13]。一方、州知事レベルでは世代交替が進み第三世代(初代国王の孫)が中核となっている。

サウジアラビアには 13 州の地方行政区がある。国土は日本の 6 倍近くあるが、人口は 17 百万人(外国人を含めれば 23 百万人)に過ぎずない[14]。人口はリヤド、ジェッダ及びダンマンの三大都市圏に集中しているが、地方では昔ながらのベドウィンの部族社会が幅を利かせている。サウド家はアラビア半島を征服するためこれら地方部族を時には武力で制圧し、或いはアブドルアジズ自身が相手の部族長の娘を娶ることにより同盟関係を築いた(第 4 回参照)。従って地方の部族と良好な関係を維持し或いは彼らの不満を和らげることは州知事の重要な役割である。

13 州のうちリヤド州、マッカ州及び東部州の 3 州は特に重要である。リヤド州は首都リヤドを擁する同国の中心であり、またサウド家発祥の地でもある。マッカ州は紅海沿岸に面し、商業都市ジェッダ及びイスラーム教の聖都マッカがある。そしてアラビア湾に面した東部州は油田地帯であり同国の財政を支えている。

知事は官選であり国王が任命する。その結果、13 州の知事のうち 11 名は第二世代或いは第三世代の王族であり、残る 2 名もサウド家五摂家(第 1 回参照)のジルウィ家出身、及びサウド家と深い姻戚関係を持つスデイリ家出身である。つまり 13 名の知事全員がサウド家の身内なのである。

王族知事 11 名とその血縁関係及び年齢は以下のとおりである[15]。

サルマン・リヤド州知事（故アブドルアジズ初代国王 25 男、スルタン皇太子実弟。71 歳）
ハーリド・マッカ州知事（故ファイサル第 3 代国王 3 男。67 歳）
ムハンマド・東部州知事（故ファハド第 5 代国王次男。57 歳）
アブドルアジズ・マディナ州知事（故マジド・マッカ州知事次男。不詳）
サウド・ハイール州知事（故アブドルモホセン・マディナ州知事次男。60 歳）
ムハンマド・バーハ州知事（故サウド第 2 代国王次男。73 歳）

ファイサル・アシール州知事（故ハリド第４代国王次男。不詳）
ファイサル・カシーム州知事（バンダル王子長男。64 歳）
ファハド・タブーク州知事(スルタン皇太子次男。57 歳)
ミシャール・ナジュラン州[16]知事（故サウド第 2 代国王 14 男。不詳）
ファハド・ジョウフ州知事（バドル国家警備隊副司令官 3 男。不詳）

(注)北部国境州知事はジルウィ家出身、ジザン州知事はスデイリ家出身である。

11 名の王族知事のうちサルマン･リヤド州知事は第二世代であるが､その他は全員第三世代である。最近の例を見る限り、昨年 10 月のマッカ州のように知事の交替は現職が亡くなった場合に限られている。当時アブドルマジド・マッカ州知事(当時)は米国で病気療養中であり執務不能の状態であったが､後任知事(ハーリド･アシール州知事の横滑り)が任命されたのは彼が亡くなった後のことである。現状では知事は終身制であると言っても過言ではない。

また知事の顔ぶれには第 2 代サウド国王から第 5 代ファハド前国王までの歴代国王の息子達が揃っている。さらにスデイリ・セブンとその息子達もリヤド州知事(サルマン)、東部州知事(ファハド前国王子息)、タブーク州知事(スルタン皇太子子息)の座を占めており、一族の優遇振りが目立つ。

アブダッラー国王は 2005 年の知事任期(４年)の満了に際し全員を再任した。彼が知事全員を再任したのはサウド家内部に余計な摩擦が生まれることを懸念したからと考えられる。つまり知事の任命基準は本人の行政能力よりもむしろサウド家内部の勢力バランスを考慮した結果と言えそうである。スデイリ･セブンに属するサルマン・リヤド州知事とムハンマド東部州知事の続投などはその好例であろう。

これはあくまで筆者の個人的見解であるが、彼ら二人の行政能力には多少の疑問を感じる。特にサルマン知事の場合、3 年前にリヤドでテロ事件が多発し首都の治安が問題となったケースを考えるとその感が強い。この時の一連のテロ事件を押さえ込んだのは実兄のスルタン国防相(現皇太子)あるいはナイフ内相であり、サルマン知事本人ではなかった。リヤド州知事が単なるテクノクラートであれば更迭されてもおかしくなかったはずである。また東部州知事のムハンマドについても新聞で見る限り市民の前に姿を現すことも稀で、行政上も確たる実績が見られないように思われる。

サウジアラビアの地方自治は、昨年漸く州議会(Municipal Council)の半数が選挙で選ばれるようになったばかりであり、知事の公選制は当分先のことである。サウジアラビアが「サウド家のアラビア」であり続ける限り、大都市のみならず地方部族を掌握するためにも知事の国王任命制は変わらないであろう。そのため国王が知事を選ぶ基準も結局サウド家内部の勢力関係を色濃く反映したものにならざるを得ないようである。

(第 9 回)要職を独占するサウド家の王族(その３)：世襲化する高級官僚のポスト

閣僚或いは知事に次ぐ高級官僚のポストにもサウド家の王族が数多くひしめいている。アブダッラー

国王など初代国王の子息である第二世代 36 人のうち存命者は 21 人であるが[17]、彼らの息子達、即ち第三世代の男子王族は 2 百人を超えている。アブドルアジズ初代国王の直系男子王族は既に第六世代まで誕生しており、男子王族の総数は 8 百人を下らない(Abdul Rahman bin Sulaiman Al-Ruwaishid 著のサウド家系図による)。その多くは二十歳を超えており、彼ら王子達の望みは王族に相応しい名誉と報酬が保証される社会的地位を得ることである。

世界的な大富豪として知られるワーリド王子のようにビジネスの才覚がある王族は稀であり、多くの王族は結局そのポストを官界に求めることになる。従って王族内部では高級官僚のポストを巡り熾烈な争いが繰り広げられる。そこでは本人自身の能力よりもむしろサウド家内部での「コネ」が大きくものを言う。下記のリストは高級官僚ポストに就いている王族達（現職以外も一部含む）であるが、「親の七光り」こそ高級官僚ポストを獲得する最良の手段であることは一目瞭然である。

なおリストの先頭の数字は世代（第二、第三または第四世代のいずれか）を、＊印はスデイリ･セブン及びその子息・孫であることを示している。カッコ内は父親(又は祖父)の名前である。

(国防・治安部門)
③ムテーブ国家警備隊副司令官(アブダッラー国王 3 男)
③マシャリ国家警備隊東部地区副司令官（サウド第二代国王 32 男）
④ハーリド国家警備隊西部地区副司令官（初代国王長男トルキ王子の孫）
④ミシャル国家警備隊顧問（サウド第二代国王の孫）

②アブドルラハマン国防副大臣(初代国王 16 男)
③＊ハーリド国防省副大臣（スルタン皇太子兼国防相長男）
③バンダル国防省顧問（ファイサル第三代国王 7 男）
③トルキ・アブドルアジズ空軍基地司令官（初代国王 7 男ナセル王子 7 男）
③マンスール・アブダッラー空軍基地司令官(初代国王 10 男バンダル王子 2 男)

②ムクリン中央情報局長官(初代国王 35 男)
②マムドーフ戦略研究所所長（初代国王 28 男）
③＊バンダル国家安全委員会事務局長(元駐米大使)(スルタン皇太子 3 男)
③＊トルキ情報省次官（スルタン皇太子 5 男）
③アブドルアジズ中央情報局局長(初代国王 10 男バンダル王子 4 男)

②アハマド内務省副大臣(初代国王 31 男)
③＊ムハンマド内相補（ナイフ内相 2 男）
③ムハンマド内相顧問（初代国王 6 男サアド王子 2 男）

(外交部門)
③ムハンマド駐英大使（ナッワーフ前中央情報局長官長男）
③トルキ前駐米大使（ファイサル第三代国王 8 男）

(石油省)
③ファイサル石油省顧問（初代国王 21 男トルキ王子 3 男）
③＊アブドルアジズ石油省顧問（サルマン・リヤド州知事 4 男）

(その他の中央官庁)
③＊ファイサル企画省副大臣（スルタン皇太子 4 男）
③＊スルタン青年福祉庁長官（ファハド前国王 4 男）
④＊ナワーフ青年福祉庁副長官（ファハド前国王長男故ファイサル王子長男）
③ファイサル教育省次官補（サウド第二代国王 7 男）

(副知事、市長)
③＊サウド東部州副知事(ナイフ内相長男)
③ミシャル・ジェッダ市長（故マジド・マッカ州知事長男）
④ファイサル・バーハ州副知事（ムハンマド・バーハ州知事 2 男）

(参考家系図)「サウド家第二～第五世代の主要王族」(2017.6.22 付け)
http://menadabase.maeda1.jp/3-1-1.pdf

世代別では第三世代(アブドルアジズ初代国王の孫達)が大半を占めているが、年齢の若い第二世代も数名いる一方、初代国王の曾孫である第四世代も登用されており、世代のバラエティに富んでいる。

国防治安部門の要職に数多くの王族が名を連ねているのは、サウジアラビア王国つまりはサウド家の体制を守るためであることは論を待たない。このうち国家警備隊はアブダッラー国王が隊長を兼務する軍事組織である。これはサウド家に忠誠を誓う部族で編成されており、いわばサウド家の近衛部隊である。アブダッラーが国家警備隊長となったのは半世紀近く前、彼が未だ 40 歳前の 1963 年のことである。従って国家警備隊はアブダッラー国王の親衛隊と言える。

これに対して国防省はスルタン皇太子が国防大臣を兼務し国家の正規軍を統括している。正規軍は米英の最新鋭戦闘機・戦車などの近代兵器を保有し、防空・防衛レーダーシステムなどのハイテク設備を駆使している。スルタンが国防大臣に就任したのはアブダッラーとほぼ同じ 1962 年である。こうしてアブダッラーとスルタンはそれぞれ国家警備隊と正規軍と言う国防の二大勢力を半世紀近く率いており、しかも自分達の子息ムテーブとハーリドを No.２に据えているのである。正規軍と国家警備隊はサウド家内部におけるスデイリ派（スルタン皇太子を頂点とするスデイリ・セブン一族）と非スデイリ派（アブダッラー国王他のスデイリ・セブンに対抗する一派）のバランス･オブ･パワーとなっている。

スデイリ一族にはスルタン皇太子兼国防相、ナイフ内務相、アブドルラハマン国防副大臣、アハメド内務副大臣、ハーリド国防副大臣などの閣僚クラスがいる（前章参照)。更にバンダル国家安全委員会

事務局長（スルタン皇太子 3 男、元駐米大使)、ムハンマド内相補（ナイフ内相次男)、トルキ情報省次官(スルタン皇太子 5 男)などもおり、一族は国防･治安のポストをがっちり握っている。このほかファハド前国王の 4 男スルタン及び長男の息子ナワーフが青年福祉庁の長官・副長官であり、スデイリ一族の勢力は今も強い（上記リスト＊印参照)。

王族が自分の息子を No.２に据える例は、ムハンマド･バーハ州知事が 2 男のファイサルを副知事とするなど地方行政組織にも見られる。サウド家の王族が増え続ける一方、行政組織の高級ポストは限られている。このため第二世代の王族がそのポストを息子や孫など直系一族に継がせようとする強い動機付けがある。しかし世襲化はその反動としてポストを得られない他の王族の不満を招くであろう。またこれまでは血の繋がった兄弟として強い結束力を誇ってきたスデイリ･セブンもその息子達の時代になった時に従来のような関係を維持できるかどうか疑わしい。例えば従兄弟同士の関係であるスルタン皇太子とナイフ内相の息子達が、父親同士と同じような強い信頼関係を発揮できるとは思えないからである。

サウド家王族内部のポスト争いは､従来の単なる直系血族による縁故主義だけではなく､本人の能力、人望或いはカリスマ性などの属人的要素としての実力主義が加味される時代に移りつつあるのかもしれない。

(第 10 回)王族とビジネス(1)：サウド家と大商人の関係

これまでに見てきたようにサウド家の王族は主要閣僚､知事および高級官僚ポストを独占している。「サウジアラビア」が「サウド家のアラビア」である以上当然のこととも言えよう。そしてサウド家の強大な力をもってすれば、政官界のみならず経済界を支配することも不可能ではないはずである。それにもかかわらずサウド家王族の中にビジネスへ進出する者は殆どなかった。その理由として二つのことが考えられる。一つはサウド家の出自がベドウィンだと言うことであり、もう一つは建国から現代に至るサウド家と民間の大商人達との関係であろう。

サウド家はアラビア半島中央部ネジド地方のベドウィンである(「第 1 回：サウド家のはじまり」参照)。彼らは現在の首都リヤドのはずれにあるオアシス、ディルイーヤでラクダや羊の放牧とナツメヤシの栽培で生計を立てていた。ベドウィンはこのようにオアシスで細々と農業や牧畜を営む一方で、砂漠を横断する隊商を護衛して通行料を取り、時には敵対する部族や隊商そのものを襲撃して略奪を繰り返す遊牧民でもあった。

彼らベドウィンは武勇を尊ぶ誇り高い部族であり商業を蔑んでいた。日本の武家社会を例に出すまでもなく、武力で支配しようとする者が商人達を蔑視する風潮は古今東西を問わない。裏返して言えばベドウィンには商才という DNA が育たなかったとも言える。サウド家の王族にビジネスマンが育たなかった第一の理由である。

第二の理由はサウド家がアラビア半島紅海沿岸(ヒジャズ地方)の征服に乗り出したとき、地元の大商人達とギブ・アンド・テイクの関係を結んだことにある。イスラム教の聖都マッカとマディナを抱え

たヒジャズ地方は当時からネジド地方とは比較にならないほど豊かであり、ジェッダはこれら二大聖都の門前市として栄えていた。ジェッダには南方のイエメンや北方のレバノンなどから商人が集まり、世界中から訪れる巡礼者を目当てに旅籠や土産物屋など幅広い商売を行っていた。当時彼ら商人達はオスマン・トルコからマッカの太守のお墨付きを得ていたハーシム家(現在のヨルダン王家のルーツ)の庇護を受け、その見返りとして巡礼者相手の商売から得た利益の一部をハーシム家に上納していたのである。

ヒジャズ地方の征圧に乗り出したサウド家のアブドルアジズは、ジェッダの大商人達にこれまで通り彼らの権益をそのまま認め、その見返りとしてサウド家への忠誠を求めた。彼らがその要求に従った結果、聖都マッカとマディナはサウド家のものとなった。こうしてサウド家は単なる武力による支配者としてだけではなく、イスラムの守護者としての正統性も主張できるようになったのである（後に第五代国王ファハドは、自らを「国王」であると同時に「二大聖都の守護者」と名乗るのである。）

(写真はマッカのカーバ神殿)

サウド家がアラビア半島全域を支配したことにより、大商人達のビジネス・チャンスが拡大したことは言うまでもない。当時はまだ石油が発見される前であり、半島征服戦争に明け暮れるサウド家の財政は非常に厳しく、アブドルアジズは大商人達に財政的な支援を求め、彼らはそれに応じた。こうしてサウド家と大商人達は、パトロンと庇護される者という関係を築いたのである。つまりサウド家は政治、外交及び軍事・警察の役割を担い、大商人達が経済を担うと言う関係である。その結果両者の間にお互いの領分を侵さないと言う暗黙の了解が生まれた。つまりサウド家の王族はビジネスに手を出さない、と言う不文律である。

第二次大戦後に石油の本格生産が始まるとこの不文律はむしろ強まったと言える。何故ならサウド家に莫大な石油の富がもたらされたことにより、サウド家は王族全員を扶養することが可能になり、彼ら王族はビジネスに手を染める必要がなくなったからである。王族男子は生まれると同時に一生王族としての生活費を与えられるようになった。さらに石油の富は国内インフラの整備、石油化学プラントの建設と運営、西欧近代兵器の輸入などにばらまかれたが、それは利権として一部王族の懐を潤すことにもなった。こうして王族はビジネスに汗水を垂らす必要は全くなくなり、大臣、知事、高級官僚などのポストに就くことで名誉と富を得ることができたのである。

(第 11 回)サウド家とビジネスの関わり(2)：ビジネスに進出した二人の王族

石油発見以前はサウド家が大商人達を庇護する見返りに、彼ら商人達がサウド家を財政的に支援するパトロンの役割を果たしていた。このためサウド家王族と商人達の間にはお互いの領分を侵さないと言う不文律があった。サウド家の王族は政官界の重要ポストを独占し、さらに石油が発見された後は豊かな石油の富を一族に配分することができたため、王族は名誉と経済的安定に安住し、あえて競争の激しいビジネス界に進出する必要はなかった。これがサウド家の王族がビジネスに手を出さなかった理由である。

そのような中で敢えてビジネス界に進出し成功した二人の王族がいる。1 人は故ファイサル第三代国王の長男アブダッラー王子であり、もう 1 人が世界的に有名な富豪アル・ワーリド・ビン・タラール王子である。アブダッラー王子はアル・ファイサリア・グループを創設し、ソニー、仏ダノン社などの独占代理店としてサウジの国内市場に確固たる地位を占めている。そしてアル・ワーリド王子は金融コングロマリット Kingdom Holding を率い、シティ・グループの筆頭株主となるなどブルー・チップと呼ばれる優良銘柄を多数所有している。

アル・ファイサリア・グループのアブダッラー王子は祖父のアブドルアジズ初代国王がアラビア半島征服に邁進している最中の 1922 年に彼の 3 男で後に第三代国王となるファイサルの長男として生まれた。彼は父ファイサルの皇太子時代に 29 歳の若さで内相に就任したがその後実業界に転じた。彼の母親はスデイリ家の出身であり、ファハド前国王、スルタン現皇太子など有名な「スデイリ・セブン」の母親とは姉妹関係にある。従ってアブダッラー王子は父系で見ればスルタンとは叔父・甥の関係であると同時に、母系で見れば両者は従兄弟同士という込み入った関係なのである。なおサウド外相はアブダッラーの異母弟である。

アブダッラーが 1970 年にアル・ファイサリア・グループを設立して本格的なビジネスに進出しようとした矢先の 1975 年に、父親のファイサル第三代国王が同じ王族で義理の甥に暗殺される悲劇が生じた。しかし彼は父から遺産として引き継いだ広大な土地に畜舎を建設、外国から乳牛を輸入して酪農業を始めた。彼の興した Al-Safi 社はいまや国内シェア 30%を誇る最大の乳製品メーカーである。またグループはソニーの総代理店として国内家電市場でもトップである。アブダッラー王子は今年 85 歳で亡くなったが、グループは彼の息子や孫達によって引き継がれている。

Kingdom Holding を率いるアル・ワーリド王子は 1955 年生まれで 52 歳、父親はアブドルアジズ初代国王の 18 男タラール殿下である。タラール殿下の母親はコーカサス出身であり、またアル・ワーリドの母親モナ妃はレバノンの初代首相の娘である。このように彼の血統はサウド家の中でも主流とは言い難く、また父母が早く離婚したため母親に引き取られ彼は幼児期をレバノンで過ごしている。

このような出自が彼が官界に背を向けてビジネスに身を投じる動機になったと思われるが、最大の理由は彼の父親タラール殿下がかつてサウド家に背いた「自由プリンス」の 1 人であったためと考えられる。「自由プリンス」とは 1960 年代にエジプトのナセル首相の時代にアラブ民族主義思想が吹き荒れた時、この思想に感化されたタラールなど一部の王子達を指す言葉である。彼ら「自由プリンス」はサウジアラビアの民主化を叫び、サウド家内部に深刻な波紋を投げた。彼らは当時のファイサル国王を中心とする保守層から厳しく糾弾され、ナセルのもとに亡命したのである。しかしナセルと王子達が折り合うはずもなく、結局数年後タラールはファイサル国王に詫びを入れて帰国を許され

たのである。このような事情のためアル・ワーリド王子は政官界の道を閉ざされ、実業界に進出するほかなかった。

アル・ワーリド王子は父親から借りた 3 万ドルを元手に不動産業を始め、その後、1970 年代のオイル・ブームに沸く国内でトントン拍子に資産を膨らませた。そして米国の株式投資に手を染め、当時不良債権で瀕死の状態にあったシティ・バンク(現シティ・グループ)の株を買い集めたのである。この作戦は大成功し 5.5 億ドルの投資が最終的には 100 億ドルに化けた。2007 年のフォーブス誌長者番付によれば、彼の資産総額は 203 億ドル、世界 13 位（アラブ世界ではトップ）の大富豪にランクされている。

アブダッラー王子とアル・ワーリド王子がビジネスに進出した背景には一つの共通点がある。それは彼らの父親を巡る事件が彼らの運命を変えたと考えられることである。アブダッラー王子は父親が暗殺されたことにより、またアル・ワーリド王子の場合は父親がサウド家に背いたため、結局彼らは政官界での栄達の道を閉ざされ、ビジネス界に進出する以外に選択の余地はなかったのであろう。そして何よりも血縁が重視されるサウド家の中で父親の威光を利用することのできなかった二人の王子は独立独歩で道を切り開いていったのである。

(第 12 回)サウド家の有力家系(1)：アブダッラー国王[18]家

これまで 11 回にわたってサウド家の歴史或いは王族の閣僚・知事・高級官僚について概観してきたが、今回から数回に分けて現在のサウド家を構成する有力な家系について考察することとする。

アブドルアジズを第一世代とする第三次サウド王朝は既に第六世代まで誕生しており[19]、男子王族の数は千人を超えている。18 世紀初頭の第一次サウド王朝にまで遡ればサウド家の家系は無数とも言える数にのぼるが、ここではアブドルアジズの子息達、即ち第二世代のうち有力と考えられる何人かの王族とその子孫の家系を取り上げることとする。

なおサウド家の王族には名前の最後に「サウド家」であることを意味する「Al Saud」が付けられている。第一次、第二次サウド王朝から派生した傍系王族にはスナイヤーン家、ジャラウィ家などを名乗る家系もあるが(第 1 回「サウド家のはじまり」参照)、第三次サウド王朝であるアブドルアジズの息子達の家名は、故ファイサル国王の子息と孫達が自らを「ファイサル家(Al Faisal)」と名乗っていることを唯一の例外として、その他の第二世代の王族とその子孫は全て「サウド家」の家名を使用している。

しかし本稿では第二世代の王子の名前をそのまま家系名とし、以下の通りアブダッラー国王とその子孫を「アブダッラー家」、スルタン皇太子[20]とその子孫を「スルタン家」等と呼ぶこととする。

アブダッラー家（「アブダッラー国王家々系図」参照）

アブダッラー家の当主アブダッラー現国王はアブドルアジズ初代国王とアラビア半島で最も有力な

ベドウィンであるシャンマル族出身のアル・ファハダ王妃の間に生まれた男子である。彼自身もベドウィンの生活慣習を最も重視し、春先に首都リヤド郊外の砂漠で行われるベドウィンの祭典「ジャナドリーヤ」では必ず開幕宣言を行うほどである。因みにこのジャナドリーヤの祭典には英国のチャールズ皇太子もほぼ毎年顔を出しており、サウジアラビアと英国の王室の親密さを印象づけている。

実の兄弟が無いアブダッラーは、「スデイリ・セブン」と呼ばれ多くの兄弟を持ったファハド前国王とは対照的である。ファハドは若くして欧米文化に触れ、皇太子・国王時代を通じて親米的な方針に終始したが、一方のアブダッラーはイスラム教育で育ち、また彼自身がベドウィンの流儀を好んだため保守的とみなされてきた。そしてファハドが弟達との強い結束でサウジアラビアの近代化を進めてきた中で、アブダッラーは皇太子という No.２のポストにありながら、むしろスデイリ兄弟に疎外され目立たない存在であった。そのため 1982 年に彼が皇太子に指名された時、欧米では彼のことを単に保守的でおとなしい王族としか理解していなかった。

しかしファハド前国王が病床に伏し 90 年代半ばにアブダッラーが実権を掌握すると、彼が有能で他の王族や部族に人気の高い為政者であることが明らかになった。それは血族に対する依姑贔屓がなかったこと、またサウド家以外の他の部族とも強い信頼関係を醸成し、ベドウィンの伝統である話し合い（マジュリス）の精神を尊重したためと言える。こうして彼は今では国内でカリスマ的な人気を得ており、さらには対外面でもアラブ・イスラームの指導者として揺るぎない地位を確立している。

アブダッラーの権力基盤は国家警備隊(National Guard)である。国家警備隊はサウド家に忠誠を尽くす各地の部族が中核となっているサウド家の近衛部隊とでもいうべき存在であり、正規軍と共に国防の双璧をなしている。アブダッラーは 40 年以上前の 1963 年に国家警備隊の司令官となり、国王になった現在もその地位にとどまっている。因みに正規軍についてはスルタン(現皇太子)が 1962 年に国防大臣に就任し現在に至っている。このようにアブダッラーとスルタンは国防面で勢力を二分しているのである。

アブダッラーはこれまでに少なくとも 5 人以上の女性と結婚し、10 数人の王子を含め 30 人以上の子供をもうけている。そのうちアヌード妃との間に生まれたムテーブ王子(1949 年生)が父親の右腕として国家警備隊副司令官の地位にある。彼の実兄ハーリド王子もかつては国家警備隊東部地区副司令官であったが、現在は民間企業数社の会長・社長をつとめている。その他アイーダ妃の長男アブドルアジズ（1964 年生）は Millennium Fund の会長であり、また彼の実妹のアディーラ王女はジェッダ商工会議所の女性部会長である。

このようにアブダッラーの子供達には国家警備隊以外の官職に就く者が無く、実業界に名を連ねる者が多い。この状況を見る限りではアブダッラーが息子達を官職に就けることに熱心でなかったように見受けられる。これは彼自身の性格が淡白であるためと言うより、むしろファハド前国王時代にスデイリ・セブンが大臣や中央官庁の高級官僚ポストを一族で独占したことに原因があると思われる。アブダッラーは、国家防衛隊を自己の勢力の中核とし、またそれを通じて地方の部族を味方に引き付け

ることでスデイリ・セブンに対抗しようとしたのであろう。

スデイリ・セブンのスルタンとナイフが国防相と内務相としてサウジアラビアの国防・治安を押さえていることに対抗して、アブダッラーは国家警備隊組織を通じて地方の有力部族を自陣営に引き込んでいる。そして彼の弱点である外交関係についてはファイサル家のサウド外相[21]を、また経済関係についてはタラール家のアル・ワーリド王子(Kingdom Holding オーナー)をそれぞれ味方につけることでその弱点をカバーしていると言える。つまり中央政府の国防・治安を握るスルタン家及びナイフ[22]家のスデイリ兄弟を、地方組織を掌握するアブダッラー家と外交を握るファイサル家が包囲するとでも言うべき図式である。

但し今後スルタン・ナイフ(スデイリ)連合対アブダッラー・ファイサル連合の権力闘争が表面化すると見るのは皮相であろう。これら４家はあくまで「サウド家」の傘の下の運命共同体であり利益共同体である。一族の内紛がサウド家王政の命取りになることは彼ら自身が一番良く認識しているはずだからである。

(第 13 回)サウド家の有力家系(2)：スルタン皇太子家(スデイリ・セブン 1)

スルタン皇太子[23]はアブドルアジズ初代国王の 15 番目の息子である。母親のハッサ妃は名門スデイリ家の出身で、同妃はアブドルアジズとの間に 7 人の男児を産んだ。彼ら 7 人は「スデイリ・セブン」として有名であり、スルタンはその次男である。長男のファハド前国王は 2005 年 8 月に亡くなったため今ではスルタンが「スデイリ・セブン」のリーダーである。

スルタンは 1926 年 (1928 年或いは 1924 年説もある)生まれで、1947 年にはわずか 21 歳の若さでリヤド知事となり、1953 年に農業大臣として入閣している。そして 1962 年には国防航空大臣(現)に就任し、大臣在任期間は実に 45 年の長きにわたっている。1982 年に第 4 代国王が亡くなり、長兄のファハドが第 5 代国王兼首相に即位した時、ファハドは皇太子兼第一副首相にアブダッラー(現国王)を指名したが (同国では皇太子が第一副首相を兼務することが慣例となっている)、同時に実弟スルタンを第二副首相に指名した。これは将来、スルタンの皇太子ポストを確実にするための布石であり、実際 2005 年のファハド没後スルタンはアブダッラー新国王から皇太子に指名されたのである。

スルタンには 6 人の女性との間に 32 人の王子・王女がいるが (「スルタン皇太子家々系図」参照)、その中で最も有名なのは元駐米大使で現在は国家安全委員会(NSC)事務局長のバンダル王子であろう。その他の王子ではバンダルの異母兄弟でハジール妃の長男ハーリド王子が父親スルタンの右腕として国防・航空副大臣を務めており、その実弟トルキ王子が情報省次官である。また彼らの異母兄弟でムニーラ妃の長男ファイサル王子が企画省副大臣、その実弟ファハド王子はタブーク州の知事である。このようにスルタンの息子達はサウジアラビアの中央省庁・地方行政府に深く根を張っている[24]。

バンダル NSC 事務局長は 1949 年生まれである 。彼の母親はアフリカ生まれの奴隷でスルタンの召使であった。そのため彼女は正式の王妃となることができず、単に「ウンマ・バンダル(バンダルの母親)」と呼ばれている。しかし父親スルタンが王族であるため、バンダル王子は正式なサウド家の王族として扱われた。王子は英国の Cranwell 空軍大学でパイロットの資格をとり、帰国後はサウジ空軍中尉となった。そして彼は当時国王であったファイサルの娘ハイファ王女と結婚した。因みにハイファ王女はサウド外相(現)[25]の実妹であり、従ってサウド外相とバンダル王子は義理の兄弟と言う関係になる。

バンダル王子は 1978 年以降、外交分野に転進する。当時はサウジアラビアにとって第一次オイル・ブームであり、国防分野でも米英の新鋭戦闘機を含む最新兵器に大量のオイル・マネーが注ぎ込まれた時期であった。ここでバンダル王子のパイロット時代の米英での経験と人脈が大いに活きてきたのである。当時、マクドネル・ダグラス社製最新鋭戦闘機 F-15 のサウジアラビアへの売却議案が米国議会で審議されていた。サウジアラビアへの売却に反対するイスラエルとそれを後押しするユダヤロビーにより米国議会には議案に反対する空気が強かった。しかしバンダル王子は強力なロビー活動を展開、ついにサウジアラビアへの F15 売却を承認させたのである。この功績により彼は 1983 年に米国大使に任命され、2005 年に帰国するまで 22 年間もの間、駐米大使を勤めたのである。

スルタン一バンダル父子には武器取引にまつわる黒い噂が絶えない。武器取引に闇献金がつきものであることは、田中角栄のロッキード事件を見れば明らかである。従って F15 戦闘機の導入時にも同じことが起ったことはほぼ間違いない。戦闘機の決定権はスルタン国防相或いは病弱のハリド国王に代わって実権を振るっていたファハド皇太子(当時)のスデイリ兄弟であり、商談の最先端にいたのがバンダル駐米大使であった。サウド家専制政治のサウジアラビアでは権力を掌握しているスデイリ・セブンの決定は絶対的である。兵器メーカーから闇献金を受け取ることについて、彼らには「汚職」と言う意識は無く、むしろ当然のことと感じていたのではないだろうか。

それはその後 1985 年の英国製戦闘機トルネードの商談に際しても変わらなかったようである。バンダル駐米大使はこの商談でも暗躍し、メーカーの British Aerospace(現 BAE)はサウド家に多額の闇献金を行っていたことが昨年になって判明した 。英国の捜査当局の調査によれば、British Aerospace 社は取引成立後、摘発を受けるまでの間に総額 10 億英ポンド(20 億米ドル)もの巨額の金をワシントンのサウジアラビア大使館に送金していた。しかし英国政府は昨年末この贈賄事件に対して強引に幕を引き事件の真相は闇に葬られたままである。

この時の闇献金の一部はバンダル大使(当時)のロビー活動費或いは彼がコロラドに所有する豪華な別荘の購入費用に当てられたようである。そして献金の大半は父親のスルタンの懐に入ったものと考えて間違いない。兵器調達先の決定権を持つ国防大臣は巨大な利権を生むポストである。その意味でス

ルタンは明治の元勲山県有朋になぞらえることができる。山県有朋は富国強兵の国策を遂行する過程で政商から巨額の賄賂を得たといわれ、彼はその金で目白に豪壮な邸宅（椿山荘）を建てた。しかしそのような黒い噂のある山縣は庶民に全く人気が無く、総理大臣までつとめながら彼の葬儀は参列者が少なく寒々としたものであった、と伝えられている 。

スルタンも山縣同様、サウジ国民には不人気であり、海外での評判も高くない。皇太子時代には地味な印象しかなかったアブダッラーは国王に即位してから国内及び海外での評価が高まり、国民の間でカリスマ的人気すら出ている。これに比べてスルタン皇太子はあくまで「闇将軍」の趣である。長兄ファハド亡き後のスデイリ・セブンのリーダーとしては外部での人気は無関係であろうが、次期国王として国民に人気の無いことは、サウド家全体にとって必ずしも些細な問題とは言えないのではないだろうか。

(第 14 回) サウド家の有力家系(3)：ナイフ内相家とサルマン・リヤド州知事家(スデイリ・セブン 2)

1．ナイフ内相家[26]

ナイフ内相[27]はアブドルアジズ初代国王の 23 番目の息子であり、有名な「スデイリ・セブン」の 5 男である。彼は 1933 年生まれで今年 74 歳になる。リヤド州知事(1953-54 年)、内務副大臣(1970 年)を経て 1975 年に内務大臣となり、現在まで 32 年間にわたりその地位を保っている[28]。

リヤドの中心にある内務省は上部が逆四角錐の人目を引く建物であるが、国内の治安対策を主要業務とする同省の内実は厚いベールに包まれている。そしてそのトップに君臨するナイフ内相も表舞台に顔を出すことは少ない。宗教的戒律が厳しいサウジアラビアでは、かつては治安はさほど問題ではなく、内務省の重要な任務はサウド家に反抗するシーア派或いは過激な宗教勢力を押さえ込むことであった。

イランでホメイニ革命が発生した 1979 年以降、アラビア湾沿岸の東部地区に多数居住するシーア派の動きが活発になり騒乱事件が頻発した。また 1979 年には「マハディ(救世主)」を名乗る過激な宗教集団がマッカのカーバ神殿を占拠し、反乱者・政府側合わせて 230 名近い死者を出す大惨事も発生した。前者の騒乱は湾岸王制国家の打倒を唱えるイランのホメイニ師に国内のシーア派が同調したものであり、後者のマッカ占拠事件はサウド家の腐敗を糾弾しようとした過激な宗教グループによるものであった。ナイフ内務相はこのような動きからサウド家を守るために組織を動員したのである。

1990 年代に入ると内務省の活動の中心は国際ゲリラ組織対策に移った。アフガニスタン内戦で頭角を現したオサマ・ビン・ラーディン率いるアル・カイダによるテロ事件が発生したためである。2003 年のイラク戦争後には国内でのテロ事件が続発し、ナイフは内務省の組織を挙げて犯人逮捕に躍起となった。それまでメディアに顔を出すことが少なかったナイフ内相であったが、この頃はメディアの前で盛んに犯人逮捕の成果を強調する彼の姿が見られた。しかし基本的には彼は長兄であるファハド国王と次兄のスルタン第二副首相兼国防相(いずれも肩書は当時)の陰に隠れ、あくまでも黒子の役に

徹しており、それは現在も変わらない。ただ内務相のポストを 30 数年続ける彼は、国家の隅々にわたる機密情報を握っており、それはアブダッラー国王や外交を担当するサウド外相などスデイリ以外の王族にとってかなりの脅威であることは間違いないであろう。

ナイフ内相には 3 人の王妃との間に 5 人の息子と 6 人の娘がいる。その中ではジャラウィ家から嫁いだジョーハラ妃の長男サウド王子が駐スペイン大使を、また次男ムハンマド王子が父を補佐する内相補となっている。なお長女ヌラ王女は東部州ムハンマド知事(故ファハド前国王子息)の妻である。

２．サルマン・リヤド州知事家[29]

サルマン･リヤド州知事[30]はアブドルアジズ初代国王の 25 番目の息子であり、またスデイリ・セブン(スデイリ家出身のハッサ妃を母親とする 7 人兄弟)の 6 番目の王子である。1936 年生まれの彼は 1962 年にリヤド州知事に就任し現在に至っている。サルマンは温厚な人柄に加え、イスラームの慈善活動に熱心であり、敵の少ない人物とみなされ、そのため有力な王位継承者の 1 人に挙げられてきた。

しかし 9.11 同時多発テロの後、イスラーム慈善団体の寄付金が資金洗浄(マネー・ロンダリング)されて国際イスラーム・テロ組織の資金源になっているのではないかと言う疑惑が指摘され、サルマンの慈善活動にも疑惑の目が注がれて彼の名声に傷が付いた。

さらに 2003 年から 2004 年にかけてリヤドで相次いでテロ事件が発生、サルマンの知事としての力量が問われた。この時は彼の兄のナイフ内相が陣頭指揮を取りテロ組織の摘発に辣腕を振るい沈静化させた(上記参照)のであるが、治安対策は内相の責任とは言え、もしリヤド州知事が非王族であれば当然更迭されてもおかしくない状況である。サルマンが更迭されなかったのは実兄のナイフ内相あるいはスルタン国防相(現皇太子)の配慮であったことは間違いない。

その意味で彼の「温厚さ」とは兄達に対する「従順さ」と考えられなくもない。さらにサルマンは持病を抱えており年齢も既に 70 歳を超えている。そのため現在では彼を有力後継者候補と見る向きは少なくなっているようである。

サルマンには 11 人の息子がいるが、そのうち長男と三男は 2001 年とその翌年に相次いで亡くなっている。長男は心臓病で亡くなっているが、三男の死亡原因は公表されず、巷間では 9.11 時件との関わりが噂された。この二人の息子の死亡は、健康問題或いはイスラーム慈善活動に対する疑惑と言ったサルマン自身の背負った業を象徴するような出来事である。

4 男のアブドルアジズ王子(1960 年生)は石油省次官のポストについている。彼は 1990 年代後半、アラビア石油の利権延長問題のサウジ側窓口として活躍した。野心の強い王子は功名心に駆られて日本側に無理難題を押し付けたが、そのため交渉は決裂、両国関係はその後暫く冷却状態が続いた。彼は現在も石油省次官であるが、同じ次官で従兄弟のファイサル王子に比べて影が薄いようである。

サルマンは表向きのリヤド州知事の職責に加え、裏の顔として中央情報局を握っている、との説がある 。実兄のナイフが治安の総責任者であり、またサルマン家が国内最大のメディア企業 SRMG(Saudi Research & Marketing Group)社のオーナーであることと考え合わせると、あながち根拠がないとは言えない。

但しこの点については筆者の見解は異なっている。即ち SRMG 社については現在の社主はサルマンの 5 男ファイサル王子であるが、同社は昨年大富豪として有名なアル・ワーリド王子(サルマンの異母兄タラール殿下の子息)が 25%の株式を取得して筆頭株主となっていることに留意する必要がある 。アル・ワーリド王子はアブダッラー国王寄りと見られているだけに現在の SRMG 社がサルマン家(或いはスデイリ・セブン)だけのものと考えにくいからである。さらに中央情報局についても、現在の長官(初代国王の 35 男ムクリン王子)が就任したのはファハド前国王死去後の 2005 年 10 月のことである。ファハド前国王が亡くなった後、スデイリ・セブンの勢力は長期低落気味であるが、その中でもサルマン家は特に凋落しつつあると考えられるのである。

(第 15 回)サウド家の有力家系(4)：ファハド前国王家(スデイリ・セブン 3)

ファハド第 5 代国王[31]は 1923 年(1921 年説もある)にアブドルアジズ初代国王の 10 男として生まれた。名門スデイリ家出身のハッサ王妃の最初の男子である。スデイリ妃は彼を含め 7 人の王子を産んだが、彼らは「スデイリ・セブン」と呼ばれ、後に国家の枢要なポストをほぼ独占する巨大な勢力となり、2005 年にファハドが亡くなった後もサウド家の中で穏然とした勢力を保っている。

ファハドは二十歳を過ぎてから度々英米を訪問する機会に恵まれ、第二世代王族随一の親米派となった。1953 年に教育相として入閣、1963 年には内務相に就任した。翌年ファイサル第 3 代国王が即位すると、ハリド皇太子兼第一副首相に次ぐ No.3 の第二副首相に任命され次期皇太子の地位を確かなものにした。そして 1975 年にファイサルが暗殺されハリドが国王に即位すると共に皇太子兼副首相となった。ハリド国王(首相兼務)が病弱であったためファハドは既に皇太子時代から実質的な首相として国政を取り仕切ったのである。そして 1982 年にハリドが亡くなると、ファハドは正式に第 5 代国王となったのである。

1970 年代の二度にわたるオイルショックにより、70 年代後半から 80 年代前半にかけてサウジアラビアには膨大なオイル・マネーが流入した。ファハドはこの豊かな資金を駆使して道路や港湾、学校、病院などを建設、国内のインフラを整備した。例えば島国のバハレーンを海上橋で結ぶ道路もその一つであり、彼の名前に因んで「キング・ファハド・コーズウェー」と呼ばれている。オイル・マネーはこのようなインフラ整備だけではなく、最新鋭戦闘機など米英からの近代兵器の調達にも費やされた。その取引で米英の武器メーカーから多額の闇献金があったことは紛れもない事実であり、ファハド及び彼の実弟スルタン国防相を含むスデイリ一族の懐を潤した(第 13 回「スルタン皇太子」参照)。このような民生、軍事両面のバブルによりファハド家は膨大な富を蓄積し、当時の米国の雑誌でファハド国王は英国のエリザベス女王やブルネイのハッサン・ボルキア国王と並ぶ世界的な富豪として扱

われたほどである。

彼は 1986 年に「国王」と言う世俗的な称号に加えて「二大聖都の守護者(Custodian of Two Holy Mosques)」を名乗ることを宣言した。イスラームではマッカ、マディナ及びエルサレムを三大聖都としているが、ファハドは、このうちサウジアラビア国内にあるマッカとマディナの二大聖都の守護者である、と宣言したのである。これはサウド家に宗教的権威を持たせることにより、イスラーム諸外国及び自国民の支持を得ることが目的だった。

彼の行政手腕が優れていたことは万人の認めるところである。彼はサウジアラビアを近代国家とするために、インフラの整備に加え法制度の整備も行った。1992 年に制定した国家基本法、諮問評議会法及び地方制度法のいわゆる統治基本三法がそれである。国家基本法は国家の統治制度、国民の権利義務、財政など民主国家の憲法に相当する法律である。基本法ではサウジアラビアの政体を君主制とし、国王はアブドルアジズの直系男子とすること、国王が首相を兼務することなど、サウド家の絶対支配体制が明文化された。また諮問評議会が開設され、地方行政の手続きが定められた。これらは民主国家の立法府及び地方自治制度を模倣したものであるが、諮問議会の議員及び州知事の任命権はすべて国王にあり、ここでもサウド家の絶対支配が保たれている。その意味で統治基本三法は真の民主主義と程遠い、いわゆる「コスメティック・デモクラシー(化粧を施した擬似民主主義)」と言うべき代物である。

ともあれファハド国王はサウド家王族、特にスルタンなど血の繋がった兄弟と共に拡大期のサウジアラビアを取り仕切ってきた。しかし彼は 90 年代半ばに重度の心臓病を患い、以後は実質的な権限をアブダッラー皇太子(現国王)[32]に委ねざるを得なくなり、そして 2005 年 8 月、遂に亡くなったのである。

ファハド国王には 3 人の王妃との間に 7 人の王子がいる[33)]。アル・アヌード王妃との間に生まれたのがファイサル、サウド、スルタン、ハリド及びアブドルラハマンの 5 人である。ファイサル王子は青年福祉庁長官を務めたが 1999 年に死亡、スルタンが後を引き継ぎ、またファイサルの息子ナワーフ王子が副長官となっている。サウド王子は中央情報局副長官を務めていたが、父の死後退任している。

ジャウザ妃の 1 人息子ムハンマドは東部州知事である[34]。東部州はガワール油田(陸上)、サファニア油田(海上)などの大油田を抱えておりサウジアラビアの富の源泉である。サウジアラビアでは行政の中心であるリヤド州、聖地マッカと同国の商業の中心ジェッダを擁するマッカ州及び石油の東部州が三大州と呼ばれているが、スデイリー族はそのうち、リヤド州(サルマン知事[35])と東部州(ムハンマド知事[36])の二州を押さえている。

ジョーハラ妃との間に 1971 年に生まれたのが末子のアブドルアジズ王子である。他の王子達はいずれもファハドの 20 代の時の子供であるが、アブドルアジズは彼が 48 歳の時に生まれ、異母兄弟たちとはかなり年齢が離れている。ファハドは寵妃ジョーハラの息子アブドルアジズを溺愛し、アブドルアジズ王子が若干 27 歳で国務大臣(無任所)になったのはファハドの強い願いの産物である[37]、と

言われている。ファハドは病状が進行して判断能力が衰えた後も首相として車椅子に乗って閣議に出席したが、常に彼の後ろに控え車椅子を押していたのがアブドルアジズ王子であった。

余談ではあるが、ファハドの死後、その遺産の大半はアブドルアジズが相続したと言われ、それに不満を抱いたムハンマド王子(東部州知事、上記)との間で裁判沙汰になっている、とのゴシップが西欧の報道機関から流れている。ファハド家内部に亀裂が生じているようである。

(第 16 回)サウド家の有力家系(5)：解体に向かうスデイリ一族(スデイリ・セブン 4)

ハッサ・スデイリ妃を母親とする 7 人兄弟、いわゆるスデイリ・セブンは長男のファハド亡き後も次男のスルタンが皇太子となり、ナイフ内相、サルマン・リヤド州知事、アブドルラハマン国防副大臣、アハマド内務副大臣は留任しており、サウド家の中で依然強い勢力を保っている。また兄弟間の不和の噂もない。しかしこれまで兄弟の結束が堅かったのは彼らの周囲に多くの異母兄弟がおり、血の繋がった兄弟同士で助け合う必要があったからである。

アブドルアジズ初代国王は生涯に多数の女性を娶り、そのうち 17 人の王妃が合計 36 人の王子を産んでいる。王子の数はハッサ・スデイリ妃が最も多い 7 人であり、アブダッラー現国王のように 1 人息子のケースもある。彼らは一般に第二世代の王族と呼ばれる。第二世代王族 36 人のうち既に 15 人が亡くなり、残されたのは 21 人である[38]。そのうちスデイリ兄弟は 6 人[39]で全体の 3 割近くを占めている。第二世代の中では数の上でむしろ存在感を増しているようにも見える。

しかし第二世代の王子達も最も若いムクリン王子(ハイール州知事)が 62 歳であり、アブダッラー国王は 83 歳の高齢である。スデイリ兄弟とて例外ではなく、スルタン皇太子が 81 歳、ナイフ内相 74 歳、サルマン・リヤド州知事 71 歳などいずれも高齢である。サウド家の中では第三世代への交替が始まっている。

第三世代の王族にはサウド外相(ファイサル第三代国王子息)やアブドルアジズ国務相(ファハド第五代国王子息)のような閣僚やハーリド・マッカ州知事(ファイサル第三代国王子息)、ムハンマド東部州知事(ファハド第五代国王子息)など高官に就く者も出ている。さらにはハーリド国防相副大臣(スルタン国防相子息)、バンダル国家安全委員会事務局長(元駐米大使、スルタン国防相子息)、ムハンマド内相補(ナイフ内相子息)達のように父親の右腕となって組織を支えている者もいる。今後も第二世代から第三世代へのバトンタッチが進むことは間違いない。

王子の数は第二世代が 36 人、第三世代は 250 人以上にのぼる 。閣僚・高級官僚のポストは限られており、第三世代の競争は第二世代とは比べ物にならないほど厳しい。そのような中でスデイリ一族の第三世代は親達と同じように結束して高級ポストを独占することができるのであろうか。結論を言うならポスト独占は困難になりスデイリ一族は解体に向かうのではないかと考えられる。

例えばファハド(前国王)の息子アブドルアジズ(国務相)とスルタン(皇太子)の息子ハーリド(国防副大臣)は従兄弟の関係である。兄弟と従兄弟では明らかに結束の強さが違うであろう。さらにファハドを同じ父親とするアブドルアジズ(国務相)とムハンマド(東部州知事)の兄弟は、母親の異なる異母兄

弟である。父の死後、遺産相続をめぐり二人は対立しているとの風評が立っており、ファハド家の結束はおぼつかない。

スデイリ・セブン６男サルマン・リヤド州知事の息子達は石油省次官のアブドルアジズを除き他の兄弟は新聞社社主、障害児協会会長などの社会的ポストについている。社会的ポストと言えば聞こえは良いが、所詮「親の七光り」である[40]。

「売り家と唐様で書く三代目」と言う江戸川柳がある。初代や二代目の苦労を知らない三代目は家業を省みず趣味道楽に走って家運を傾け､最後に習い覚えた能筆で自宅の売り看板を書いて身代を潰す、と言う意味である。サウド家三代目の多くが物心のついた頃、同家は既に磐石の基盤を築き、しかも王族達は豊かな石油の富による飽食の生活に明け暮れていた。

血のつながりが薄くなるスデイリ・セブン一族の三代目以降は、単に「スデイリ」の名前だけで結束することは難しそうである。大胆な推理をするならば､「新スデイリ・セブン」即ち新たな同母兄弟関係（例えばナイフ内相のジョーハラ妃を母親とする兄弟)、或いは従姉妹との結婚による義兄弟の関係(サウド外相の妹を娶ったバンダル元駐米大使)が、新たな同盟関係を形成する可能性が大きい。サウジアラビアは典型的な父系社会と言われるが、兄弟や従兄弟が多すぎる場合は、むしろ母親や妻を通じた血縁関係こそ隠された鍵になっていることを見逃してはならないであろう。

(第 17 回)サウド家の有力家系(6)：ファイサル家

第三代ファイサル国王の一族は官界と実業界の両方に軸足を持つサウド家の中では珍しい一族である。ファイサルの最初の妻スルタナ王妃の 1 人息子アブダッラー王子(1921-2007)は､一代で国内有数の財閥であるアル・ファイサリア・グループを築き、三番目、四番目の妻ハヤ王妃及びイファット王妃の息子達は、サウド外相[41]、ハーリド・マッカ州知事など官界で活躍している王子が多数いる。

そしてもう一つファイサル一族が他の王族と異なる点は、彼らが「アル・ファイサル(ファイサル家)」と言う家名を名乗っていることである。前回までに触れたスルタン、ファハドなどスデイリ・セブンとその子孫を含め、アブドルアジズ初代国王の子孫は全て名前の最後に例外なく「アル・サウド(サウド家)」の称号を付けている。つまり分家を名乗っているのはファイサル一族だけなのである。それは「アル・ファイサリア・グループ」の名前が一般国民にまで広く浸透しているからであろう。ファイサル一族が「アル・ファイサル」と言う独自の称号を持つことは、サウド家の主導権が第三世代に移りつつある中で極めて興味深いことである。つまり現代風に言えば、ファイサル一族は「アル・ファイサル」の呼称によりサウド家の中でブランドを確立しつつある、と言えるのである。

ファイサルはアブドルアジズ初代国王と名門シェイク族出身のタルファ妃との間の 1 人息子であり、序列としては初代国王の三男になる(「アブドルアジズ初代国王の王妃とその息子達」参照)。異

母兄のサウド(第二代国王)が国費を蕩尽して財政を傾けたため、1964 年長老会議でサウドは退位させられファイサルが第三代国王に即位した。思慮深く聡明であったファイサルは国家の発展に尽くし、名君として今でも国民に敬愛されている。彼は宗教指導者を説得してテレビを導入し、或いは女子教育に力を入れるなど、サウジアラビアの近代化に大きく貢献したのである。

また対外面でも 1973 年の第四次中東戦争に際してファイサル国王は中東産油国を束ねて日本を含む欧米先進国に対する石油禁輸政策を発動、世界を震撼させたのである(第一次オイルショック)。しかし 1975 年、彼は不運にも急速な近代化に反対する王族の一員によって暗殺された。

彼は 4 人の妻との間に 8 人の息子と 10 人の娘をもうけた（「ファイサル家々系図」参照）。長男アブダッラー王子の母親スルタナ妃はスデイリ家出身でスデイリ･セブンの母親ハッサ妃の実妹である。つまり第三世代のアブダッラー王子とファハド、スルタンなど第二世代のスデイリ・セブンとの関係は、父親の係累で見れば伯父と甥の関係であるが、母親の係累では従兄弟同士という込み入った関係である。但しこのような婚姻関係はサウド家を含めアラブ世界では珍しいことではない。

アブダッラー王子は父ファイサルが皇太子の時代に内相に任命され将来が約束されていた。しかし 1975 年に父が暗殺されると彼の運命は暗転した。国政はスデイリ・セブンに牛耳られ官界で活躍できる場が無くなったため、彼は父の残した遺産をもとに「アル・ファイサリア・グループ」を興しビジネス界に転進した。最初に手がけたのは酪農業(アル・サフィ社)である。砂漠のサウジアラビアに酪農業は一見なじまないが、オイル・ブームに沸く 70 年代のサウジアラビアは同時にベビー・ブームの時代であり、ミルクなど酪農製品は最も成長率が高かった。アル・サフィ社は砂漠の中に空調設備の畜舎を建設、ミルク、チーズなどを生産して国内市場を席捲したのである。同社は数年前に仏の世界的酪農品メーカー・ダノン社と提携、ダノン・ブランドの各種乳加工製品を市場に送り出している。

「アル・ファイサリア・グループ」のもう一つの柱がソニー製品の国内総販売代理店である。オイル・ブームによる個人所得増大の追い風を受けてソニー製品は飛ぶように売れ、グループの家電・エレクトロニクス部門は急成長した。日刊紙アラブ・ニュースのサウジ企業百社番付(2006 年版)によれば、同グループの年間売上高は 27 億リアル(約 800 億円)、総合順位 18 位、流通業では 1 位である。

ファイサル国王の第三夫人ハヤ王妃との間に生まれたハーリド王子はアシール州知事を経て今年マッカ州知事に就任した。聖都マッカ及び商都ジェッダを抱えるマッカ州はリヤド州、東部州と並ぶサウジ三大州の一つである。リヤド州及び東部州の知事はスデイリ一族(それぞれサルマン王子及び故ファハド国王子息ムハンマド王子)が押さえており、これに対抗するような形でハーリド王子がマッカ州知事に任命されているのは、スデイリ一族の牽制を狙うアブダッラー国王の深慮遠謀と言えそうである[42]。

第四夫人イファット王妃の産んだ息子達は外交及び国防部門で活躍しており、最も有名なのがサウド外相である。1941 年生まれのサウド王子は秀才の誉れが高く、1964 年に米プリンストン大学を卒業した後、石油省次官を経て 1975 年に外務大臣に就任しており、30 年以上にわたりサウジ外交の第一線で働いている。彼の実弟トルキ王子(1945 年生)は、中央情報局長官の後 2002 年から 2005 年まで駐英大使を勤め、同年 7 月にはスルタン皇太子の子息バンダル王子の後を継いで駐米大使となった[43]。ちなみにバンダル王子の妻は兄弟の実妹ハイファ王女である。トルキ王子が駐英大使の時代は、兄のサウドが外相、義弟バンダルが駐米大使であり、兄弟 3 人で 9.11 テロ事件後微妙な関係にあった対米及び対英外交を担っていたのである。(写真はサウド外相)

しかしバンダル王子の後任となったトルキ駐米大使も在任わずか 1 年半で大使を辞めている。バンダル王子の辞任はファハド国王死去と同時期であることから、サウド家内部の権力闘争と関係付けた観測が流れたが、トルキ王子の突然の辞任は内外に波紋を呼び、その真相は闇に包まれている。

(第 18 回)サウド家の後継者問題(1)：長子相続制を採らなかった理由

アブドルアジズ初代国王が建国したサウジアラビア王国は、その後第二代国王サウドからファイサル、ハーリド、ファハドそしてアブダッラー現国王まで、アブドルアジズの息子達が王位を継承してきた。そして次期国王であるスルタン皇太子もアブドルアジズの息子である。

立憲君主制であれ絶対王制であれ王位の後継者は殆どの場合、国王(あるいは女王)の長男である。つまり英国、日本など象徴君主制の国を含めて長子相続制が採られている。サウド家のように兄弟間で王位が承継されることは現代社会では極めて珍しい。

ただしベドウィンの部族社会を歴史的に見ると必ずしも長子相続が承継ルールとなっていない。ベドウィン社会では後継者はマジュリスと呼ばれる部族の長老会議で決められた。マジュリスで部族のリーダーとして最も相応しい人物が族長に選ばれるのである。過酷な自然の中、常に他の部族との闘争に晒されているベドウィンにとって、単に族長の長男と言うだけで彼に運命を委ねれば一族滅亡の危険に晒されかねない。従ってマジュリスと言う合議体が勇猛果敢な、しかも仲間に一目置かれる人物をリーダーに選ぶことがむしろ理に適っているのである。

アブドルアジズは早世した長男のトルキ王子に代わり次男のサウド王子を皇太子としたが、彼にはサウドのほかに 20 数人の息子があり、サウド王子以降も長子相続とすることは問題をはらんでいた。つまり国内の統治基盤も固まっていないまま長子相続をルール化してサウド皇太子の未成年の息子(つまりアブドルアジズの直系の孫)にサウド家の未来を託することはリスクが大き過ぎた。父とともにサウジアラビア建国に尽くした他の息子達も長子相続制は容認し難かったであろう。サウド第二代国王の場合は濫費で国の財政を破綻させたため、長老会議は彼を退位させ、弟のファイサル皇太子を第三代国王とした。こうして兄弟間で王位を継承するという暗黙のルールが生まれた。

ファイサルが暗殺され 5 男のハーリドが新国王に即位した時、それまで兄弟の年齢順に指名されてい

た皇太子は 4 人の王子を差し置いて 10 男のファハドが指名された。それはまさにサウド家内部でのスデイリ･セブンの台頭を示すものであった。しかしそれは、王位継承は兄弟の長幼の序列に従わない、と言う前例を作ったことになる。長子相続制には長子の君主としての適格性の問題は残るもののルールとしては非常に解りやすい。それに比べて兄弟間の継承順位はお家騒動と言う内紛に繋がりやすい。サウド家のように多数の異母兄弟がいる場合は特に問題である。そのためには新国王が皇太子指名と同時に、更にその次の皇太子候補を明らかにして内紛の芽を摘む必要があった。

その結果生まれたのが第二副首相の指名である。サウジアラビアでは建国以来国王が首相、皇太子が副首相を務めている。そこに第二副首相のポストを設けたのである。第二副首相に指名されることは次期皇太子として暗黙の承認を与えられたことになる。こうしてハーリド国王、ファハド皇太子時代にアブダッラー王子が第二副首相に指名された。そしてファハドが国王に即位するとアブダッラーは皇太子となり、同時に第二副首相にスルタン王子が指名された。こうして現在のアブダッラー国王・スルタン皇太子の体制に至っている[44]。

そして第 5 代ファハド国王の時代、1992 年に「国家基本法」が制定され、また 2000 年に「王室評議会」が発足した。ファハド国王の意図は、サウジアラビアにおけるサウド家の統治の正統性を内外に明文規定として宣言することであり、同時に長老が次々と亡くなり形骸化したマジュリスを新しい組織に作り変えることであった。

「国家基本法」はサウド家がサウジアラビアの国王として行政・立法・司法の三権を掌握することを内外に宣言したものであり、(1)サウジアラビアは君主制であり、(2)アブドルアジズの子息及び孫(男子)に継承権があり国王が皇太子を指名すること、(3)立法、司法、行政の三権の拠り所は国王にあること、(4)国王は首相となり閣僚を任免すること、など絶対的な君主制を宣言している。「王室評議会」はサウド家の私的な合議体であり、皇太子を議長とする 18 名の王族で構成されている。その構成員は 3 分の 2 近い 11 名がアブドルアジズの直系子孫であり、残る 7 名はジャラウィ家など「五摂家」を含む外戚の王子が任命された。

こうして王位継承問題についてある程度の形式は整えられたが、皇太子の決定権は国王にあり、指名プロセスの不透明性が解消された訳ではなかった。それに対してアブダッラーは即位後に二つの手を打った。一つは第二副首相を指名しなかったことであり、もう一つは自分が亡き後の新国王による皇太子指名について、国王の独断専行をチェックする「忠誠委員会法」と呼ばれる組織を作ったのである[45]。

(第 19 回)サウド家の後継問題(2)：皇太子選定ルールを透明化

アブダッラー国王は皇太子にスルタン第二副首相兼国防相を指名した。第二副首相が次代の皇太子になることは、先々代のハーリド第四代国王の時代にアブダッラー自身が第二副首相に任命されて以来、サウジアラビアの慣例となっており、スルタン皇太子指名は順当なことと受けとめられた。

アブダッラー国王は 83 歳、スルタン皇太子 79 歳といずれもかなりの高齢である。スルタンの王

位継承は 80 歳過ぎとなる可能性が高く、スルタン政権が短期に終わることは間違いない。仮にスルタンがアブダッラーより早世したとしてもアブダッラー政権がさほど長くないことも明らかである。彼らと同じ第二世代の王族の中にはムクリン・ハイール州知事[46]のように第二次大戦後生まれの王子もいるが、大半は 70 歳を越えている。サウド家は世代交替の時期に入っていると言える。

首相を兼務するアブダッラー国王は即位後の内閣改造で第二副首相を置かなかった。そのことについて内外のメディアで種々の憶測が飛び交った。もしアブダッラーが死亡若しくは退位してスルタンが第 7 代国王になった場合、統治基本法に従えばスルタン新国王が皇太子を指名することになる。これまでのような第二副首相がいないため、新皇太子はスルタンの胸先三寸で決まることになる。

現在のサウド家はファハド前国王時代の名残として、スルタンを筆頭とするスデイリ･セブン一派とアブダッラー国王を中心とする反スデイリ一派の二大派閥に分かれている。穏健でコンセンサスを重視する国王が第二副首相を指名しなかったのは、二大派閥の暗闘が表面化し内外にサウド家分裂の印象を与えたくなかったためと考えられる。しかしこのまま事態が推移すると次期皇太子の決定権はスルタンが握ることになる。

そのような中で昨年 10 月、アブダッラーは勅令で「忠誠委員会法」を公布し、皇太子指名のプロセスを明文化した 。忠誠委員会とは第二世代の全王族（故人や継承権放棄者についてはその子息の 1 人）による協議機関であり、その目的は皇太子の選定が新国王及び彼に同調する一握りの王族による密室協議で行われる不透明さを避けるためである。

このような協議機関としてはファハド前国王時代の 2000 年に「王室評議会」が設置されているが、両者の大きな違いは、「王室評議会」が一部の直系王族と五摂家など外戚を含む 18 名で構成されていたのに対して、「忠誠委員会法」では外戚をはずし第二世代及びその直系王族で固めたことにある。忠誠委員会の委員は、アブドルアジズ初代国王の息子(第二世代)及び孫(第三世代)で構成され、第二世代の最年長者が委員長とされている。

委員会の構成人数は明記されていないが、初代国王の息子は 36 人であるため、委員も第二世代の存命者 21 人及び物故した王族 15 人の子息から各 1 名ずつと見るのが順当であろう。その場合、スデイリ・セブン系統は全体の 2 割の 7 人を占める最大の派閥となり、この点では「王室評議会」とさして変わりはないように見えるが､第二世代全員を対象としたことで透明性を増したことは間違いない。

委員会法では新国王が即位して 30 日以内に皇太子を指名するとされている。現在の状況を前提とするならば、アブダッラー国王が亡くなりスルタンが新国王に即位した場合と言える(但しスルタンがアブダッラーよりも先に亡くなるケースもあり得るが)。また国王或いは皇太子が重病となった時を想定して、3 人の医師を含む 5 人の医療小委員会が設置され、国王又は皇太子が執務不能になったか否かの医学的判断を行い、忠誠委員会に報告書を提出することになっている。

皇太子選定プロセスは、新国王が 3 名の候補者名簿を委員会に提出し、委員会ではその候補者の中から新皇太子を選定する。もし委員会が国王の示した候補者全員を拒否する場合は、委員会自らが独

自の候補者を国王に提示する。そして国王が委員会の候補者に同意できない時は、委員会は先に国王が提示した 3 名の中から投票で皇太子を選出する、とされている。この間、委員は新皇太子を選出するまで退席することは許されない。このあたりはローマ法王庁で新法皇を決める際の「コンクラーベ」と同じである。

このように皇太子指名のプロセスはこれまでよりも格段に透明化された。しかし忠誠委員会が何時開催され、そして皇太子に誰が指名されるかはまさに「神のみぞ知る（インシャッラー）」である。

(最終回)サウド家の後継問題(3)：混沌とする後継者レース[47]

これまで 19 回にわたってサウド家の歴史、政官界における勢力図、いくつかの有力家系等について解説してきたが、最後に今後サウド家を担い将来サウジアラビア国王になる可能性のある王族について私見を述べてみたい。

次期国王はスルタン皇太子であることは決定済みである。彼がアブダッラー国王より先に亡くなるなど余程のことがない限り、これは既定路線である[48]。従ってここではアブダッラーが亡くなり(重病で生前退位というケースも考えられるが)、スルタンが第 7 代国王となった時に王族の中で誰が皇太子に指名されるかという、ポスト・スルタン問題として検討してみたい。

アブダッラー国王は 83 歳の高齢であるが健康状態は良好のようであり、今後数年間はアブダッラー体制が続くと考えられる。従ってスルタンは 80 歳を超え、場合によっては 80 台半ばでの即位となる可能性が高い。その場合はスルタン体制が短期間になることは多分間違いないであろう。

スルタンの即位が 80 台半ばとなれば新皇太子の指名は今後 5 年或いはそれ以上先のこととなる。これまでポスト･スルタンの候補者として、スルタンの実弟ナイフ内相の名前が取り沙汰されてきたが、5 年先となれば彼自身 80 歳を超え、皇太子としては余りにも遅すぎる[49]。5 年後でも第二世代の王族のうち十数名は存命中と思われ、1945 年生まれのムクリン・ハイール州知事などはその時点でも年齢的には十分皇太子となることは可能である。第三世代の王族については、今年マッカ州知事になった 1940 年生まれのハーリド王子(ファイサル第 3 代国王子息)から 1971 年生まれのアブドルアジズ国務相(ファハド前国王子息)まで年齢に大きな幅がある。

次期皇太子としては第二世、第三の両世代にチャンスがある。5 年後或いはそれ以上先と想定されるスルタン国王誕生の時点で、新皇太子を選任する「忠誠委員会」(前回参照)が開催され、年齢及び健康面で問題が無く、将来のサウド家の家長として指導力があり、かつ人望と識見を備えた第二世代或いは第三世代の王子が皇太子に指名されることになる。

現状では後継者レースは混沌としているというのが実情であろう。ここでは問題を単純化するために現在の王族のうちアブダッラー現国王を除く全員が存命していると仮定して考えてみる。まずこれまで最有力と言われてきたナイフ内相は、上述のとおり年齢的に無理があると考えられる。しかも兄弟のスルタンとナイフで国王及び皇太子を独占することに対して他の王族から反対が出る恐れが強い。

ナイフ自身はこれまでも実兄のファハド前国王及びスルタン現皇太子の影で彼らを補佐する黒幕的な存在であった。従って彼としては血縁関係の濃い若い王子を皇太子とし、自分の影響力を維持することを狙うものと思われる。

スルタン、ナイフの実弟であるサルマン･リヤド州知事も有力な後継者候補とされてきたが、第 8 回「要職を独占するサウド家の王族(その２)」で書いたように、筆者はサルマンの能力と性格は国王に適していないと考えており、年齢的にも彼が皇太子になることはないと考える。

第三世代の有力王族の中でこれまで後継者(次期皇太子)候補に挙がったのは、サウド現外相(1941 年生、ファイサル国王子息)、バンダル元駐米大使(1950 生、スルタン皇太子子息)、アブドルアジズ国務相(1971 生、ファハド前国王子息）の 3 名である。このうちアブドルアジズが後継候補に擬せられたのはファハド存命中のことであり、現在ではその可能性は無くなったと見るのが妥当であろう。サウド外相は非スデイリ系王族の中では実力・人気ともに最も高く、かつてアブダッラー国王が彼を第二副首相（即ち次期皇太子）に任命するのではないかとの観測記事も流れたほどである。しかし最近彼は米国の病院に入院したと伝えられており、健康面で不安がある。まして今年の内閣改造で彼自身が引退を望んだにもかかわらず、アブダッラー国王が無理に留任させたとも言われている[50]。これらの点を勘案するとサウド皇太子説も少し怪しくなる。

このように次期皇太子が誰になるか推定することはかなり難しいが、あえて候補を絞りこむとすれば、上記の第二世代ムクリン王子、第三世代バンダル王子に加え、アブダッラー国王の三男ムテーブ国家警備隊副司令官、ナイフ内相の次男ムハンマド内相補佐、さらにはスルタン皇太子の長男ハーリド国防相補佐などが挙げられる[51]。但しムテーブ、ムハンマド、ハーリドの 3 人は実力のほどが不明であり、またその肩書が示すように裏を返せば親の七光りでもある。次期皇太子を選定する「忠誠委員会」のメンバーが第二世代の全ての王子本人或いはその子息により構成されていることを考えると、父親と余りに近すぎるこれら 3 人の王子はむしろ候補者としては不利であるともいえよう。

なお従来の「王室評議会」に代わり「忠誠委員会」が設置されたことにより、これまで後継者選びから除外されていた第二世代の王族にも皇太子選出に関与する権利が与えられたことは注目に値する。特にアブダッラー国王と親密なタラール王子は皇太子選定の鍵を握る重要人物の 1 人であろう。彼自身はかつて「自由プリンス」としてサウド家に反旗を翻してエジプトに亡命、その後許されて帰国した経歴を有しており、そのために王位継承権は放棄している。ちなみに彼の息子は世界的な富豪アルワーリド王子であり、アルワーリド王子もアブダッラー国王のお気に入りである。王位継承権を放棄したタラール王子は政府の要職にもつかずサウジ家庭医学協会会長など名誉職を務めている。そのため後継者問題については中立の立場で発言することができる。彼こそはまさにかつてサウド家の「マジュリス」を取り仕切った「長老」に相応しいと言えそうである。

(現代中東の王家シリーズ：サウド家編　完)

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。
荒葉一也

Arehakazuya1@gmail.com

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也
Arehakazuya1@gmail.com

(再録注記)

---

[1]「サウド家系図(始祖～サルマン現国王)」参照
http://menadabase.maeda1.jp/3-1-2.pdf

[2] 2006 年に当時の第 6 代アブダッラー国王が創設した「忠誠委員会」により後継者(皇太子)の指名はアブドルアジズ初代国王(通称イブン・サウド)の子息とその子孫に限定されたため、スナイヤーンなどの五家の外戚は後継者選定メンバーから外れた。なお第 6 代サルマン(現)国王は忠誠委員会を骨抜きにして息子ムハンマドを強引に皇太子にしたとされる。
[3] 2011 年の「アラブの春」でムスリム同胞団はエジプトの政権を奪取するなど現在もアラブ世界で大きな影響力を保っているが、サウジアラビアの「イフワーン(同胞団)」とは別個のものである。但し両者は宗教的一体感を根本思想とする点においてほぼ同種と考えて間違いないであろう。
[4] 現在の国王は第七代サルマン・ビン・アブドルアジズ国王(2015 年即位)
[5] ファハド第五代国王は 2005 年に、またスルタンは 2011 年に死去している。サルマン第七代現国王はスデイリ・セブンの 6 番目の兄弟である。
[6] 王子の人数が増えたため、宮廷費の支給対象は限定されていると言われる。
[7]「サウド家系図(Al-Saud)」参照。
http://menadabase.maeda1.jp/3-1-2.pdf

[8] 第六代アブダッラー国王は 2015 年に死去し、現在はサルマンが第七代国王。サルマン現国王も初代アブドルアジズ国王の子息であるが、母親は第五代ファハド国王と同じハッサ・スデイリ妃である。
[9] スルタンは皇太子在位中の 2011 年に死去。
[10] ナイフは実兄スルタンの後を継ぎ皇太子に即位したが 2012 年に死去。
[11] 2005 年のアブダッラー国王即位に伴いスルタンが皇太子となったが、上述の通りスルタンは 2011 年に死去、さらにスルタンの後を継いだナイフもアブダッラー国王治世中に死去したため、サルマンが皇太子となり、2015 年のアブダッラー死去に伴い第七代国王に即位し、現在に至っている。
[12] 2018 年 12 月現在の閣僚名簿は下記参照。
http://menadabase.maeda1.jp/4-1-1SaudiCabinet.pdf
[13] 2019 年 1 月現在生存している第二世代王族は下記の 7 人のみである。
サルマン(国王、25 男)、ムッテーブ(17 男)、マムドゥーフ(28 男)、アブドルイッラー(29 男)、アハマド(31 男)、マシュフール(33 男)、ムクリン(35 男)
[14] 国連人口基金の最新統計によればサウジの人口は 3,220 万人。
[15] 州知事は今も全員サウド家王族であり(1 名は外戚のジルウィ家出身)、副知事にも王族が少なくない。
「サウジアラビアの州知事・副知事」参照。http://menadabase.maeda1.jp/4-1-2.pdf
[16] 知事・副知事は国王任命制であり論功行賞の意味合いが大きく、現在はムハンマド皇太子の意向が強く働いているようである。
[17] 2019 年 1 月現在生存している第二世代王族は下記の 7 人のみである。
サルマン(国王、25 男)、ムッテーブ(17 男)、マムドゥーフ(28 男)、アブドルイッラー(29 男)、アハマド(31 男)、マシュフール(33 男)、ムクリン(35 男)

[18] 2015 年没。現在はサルマン国王。
[19] Abdulrahman S. Al-Ruwaishid 著「The Genealogical Charts of The Royal Saudi Family」Second Edition, 2005 年発行によれば第 6 世代まで検索可能であるが、現在までにさらに世代更新が進んでいると考えられ全容は不明。
[20] 2011 年没。
[21] 2015 年没。
[22] Naif bin Abdulaziz Al Saud、2012 年没。
[23] 2011 年 11 月死亡。
[24] スルタンの死後とサルマン現国王即位後にスルタン家の勢力は大幅に下がっている。「スルタン元皇太子家々系図参照。http://menadabase.maeda1.jp/3-1-5.pdf
[25] 2015 年 7 月死亡。
[26] ナイフ家々系図参照
http://menadabase.maeda1.jp/3-1-6.pdf
[27] 2012 年 6 月没。
[28] 2011 年 11 月実兄 Sultan 没後、内相兼務のまま皇太子に即位
[29] サルマン家々系図参照
http://menadabase.maeda1.jp/3-1-7.pdf
[30] 2012 年ナイフ没後皇太子に即位、2015 年 1 月アブダッラー国王死去に伴い第 7 代国王に即位。
[31] 2019 年現在の国王は第 7 代サルマン・ビン・アブドルアジズ(第 14 回「サウド家の有力家計(3)2. サルマン・リヤド州知事家参照」)
[32] 第 6 代国王、2015 年没。
[33]「ファハド第五代国王家々系図」参照。http://menadabase.maeda1.jp/3-1-8.pdf
[34] 1985 年就任、2013 年退任
[35] 2019 年 2 月現在のリヤド州知事は Faisal bin Bandar bin Abdulaziz(初代国王 11 男故バンダル王子子息)
[36] 2019 年 2 月現在の東部州知事は Saud bin Naif bin Abdulaziz(故ナイフ皇太子・内相子息)。
[37] 2011 年退任。
[38] 2019 年 3 月現在存命しているのは下記 8 人である(年齢順)。
Bandar, Mutib, Salman(現国王), Mamdoof, Abdulellah, Ahmed, Mashhoor, Muqrin
家系図 3-1-3「アブドルアジズ初代国王の王妃とその子息達」参照。
http://menadabase.maeda1.jp/3-1-3.pdf
[39] 2019 年 3 月現在スデイリ・セブンの生き残りは Salman 国王及び Ahmed の 2 名のみである。
[40] 列記したサルマンの息子たちはすでに現役を引退または閑職にとどまっている。現在は 1985 年生まれの 7 男ムハンマドが皇太子として権勢をふるっている。
[41] 2015 年没
[42] 2018 年 12 月現在の各州知事については下記参照。
http://menadabase.maeda1.jp/4-1-2.pdf
[43] 2019 年 3 月現在の駐米大使はバンダル王子の息女 Reema 王女。
[44] アブダッラー国王時代に皇太子に指名されたスルタンがアブダッラー在位中に死亡、忠誠委員会で推挙されたナイフ皇太子も死亡し、続いてサルマンが皇太子に指名された。アブダッラー没後王位に就いたサルマンはアブダッラー時代に忠誠委員会が指名した異母兄弟のムクリンを皇太子としたが、ほどなく第三世代のナイフの子息ムハンマドを皇太子に据え、自分の息子のムハンマドを副皇太子に指名したが、その後皇太子を解任、息子のムハンマドを皇太子に引上げた。これにより直系長子の王位継承制度が確立した。
[45] サルマン国王時代に入り現皇太子(子息)の選任では正式な忠誠委員会が開かれた形跡はなく、同委員会は形骸化したものと見られる。
[46] 後にサルマン国王即位時の 2015 年 1 月に皇太子に指名されたが、わずか 2 カ月で退位した。
[47] (捕逸)サウド家の後継者レースは筆者の予測と大きく異なり、本稿では皇太子になることは無いと述べたサルマンが国王に即位しており、12 年前の 2007 年当時 22 歳であったサルマンの子息ムハンマドが皇太子になると予測した者は誰もいなかった。このような展開になった最大の理由は、アブダ

ッラー国王在位中に皇太子に指名されたスルタン、ナイフが相次いで亡くなり、結局サルマンが皇太子となったことであろう。
2015 年 1 月、アブダッラーが亡くなり、サルマンは第七代国王に即位したが、その後彼は皇太子を異母弟のムクリンから第三世代で故ナイフの子息ムハンマド内相に替え、最終的に 2017 年に皇太子を息子のムハンマドに継がせて現在に至っている。その間に第二世代王子も少なくなり、サウド王家の勢力地図が替わったことにより皇太子を指名する忠誠委員会の機能は有名無実となり、ムクリン-ムハンマド(ナイフ子息)-ムハンマド(国王子息)と続く皇太子のリレー劇はサルマン国王の独断専行であった。
参考：「タナボタで皇太子になったサルマン王子」(2012 年 7 月)
http://mylibrary.maeda1.jp/0232SaudiCrownPrinceSalman.pdf
[48] スルタンは 1995 年皇太子に即位、2011 年に皇太子のまま亡くなっている。
[49] ナイフは実兄スルタン死亡後、2011 年に皇太子となったが、翌年亡くなり、実弟サルマンが皇太子になっている。
[50] サウドは 2015 年、外相の肩書のまま病死している。
参考「辞めさせてもらえないサウジアラビアのサウド外相とナイミ石油相」(2007 年 4 月)
http://mylibrary.maeda1.jp/0154SaudNaimi.pdf
[51] これらの候補者のうちムクリン、ムハンマド(ナイフ内相子息)はその後サルマン国王により皇太子に任命されたが、注記 1 の通りいずれも短期間で交代させられた。